
真・まいかたチャンプの挑戦

てりこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・まいかたチャンプの挑戦

【Nコード】

N6884F

【作者名】

てりこ

【あらすじ】

女流格闘家、他戸照子ほかとてゐしは、職場の近くで開かれるアマチュア格闘大会の初代にして現チャンピオン。彼女の強さを支えるのは闘気とっきと呼ばれる気の力だ。照子が大会に出場するには目的がある。一つは格闘が好きだから。そしてもう一つは、数年前に野試合で自分を叩きのめした男を捜すこと。名前も知らない「あの男」を見つけ出し、見事リベンジを果たせるのか。周りの格闘家をも巻き込んで、闘いのゴングは鳴り響く！かもしれない。

ROUND 1 光と風の出会い 1

春の日暮れを迎えた公園は昼間の暖かさを次第に失おうとしている。しかし、集まる人達の熱気は、一向に冷える気配はない。金曜日の夕暮れのイベントとあれば否が応でも盛り上がるというものだ。彼らの目は全て、中央に仕切られたバトルフィールドで拳を交える二人に注がれている。一時間近くに亘って繰り広げられてきた大会の、ラストバトルに熱狂しているのだ。

決勝戦に勝ちあがってきたのは、一人は二十代前半と思しき男。黒のシャツとズボン、足元はこれまた黒のスニーカーと、動きやすさと色に対するこだわりが伺える身なりだ。

青年に対するのは二十代半ばと見られる女性。白のTシャツとジーンズ。上にデニムのジャケットを羽織っている。靴は、大きな目のロゴが目につく青のスニーカーだ。

二人は軽くフットワークを取り、視線で相手を牽制した後、ほぼ同時に動き出した。

男性の、あごを狙った突きを顔を傾けてかわすと、女性は相手の足元を狙った蹴りを放つ。男はこれをバックステップでやり過ぎすと、すかさず轉身。相手の胸元に飛び込んで下段の突きを繰り出す。女はこれを手刀で体の中心からそらせる。左腕をかすめた拳がジャケットを震わせた。

二人の攻防に、ギャラリィは更に色めき立ち、自分のひいきの格闘家に声援を送る。

「てりこー！ 決勝ぐらい全力だせよー！」

誰かが叫んだ一言に、周りが同調して女性 てりこへの応援が更に熱を帯びた。

てりこと呼ばれた女流格闘家も、相手の青年も、それらの声などまるで聞こえていないかのように目の前の対戦相手に意識を集中している。

また試合が動き出す。近寄って拳を振るうと見せかけた男の蹴りがてりこの軸足である左足を狙う。その攻撃を見て取るや、てりこは体を開いて左足を振り上げる。重心を反対に置き換えたのだ。まさかそのような反応をされると思わなかったのか、青年は一瞬、驚きに目を見開く。

二人の蹴りが交錯し、離れる。体勢を整えたのは男の方が先であった。彼の得意技なのであるう、正拳突きをてりこの胸元に放った。突きを受け、てりこは顔をしかめて二、三步後ずさる。ギャラリから一層大きなどよめき声が上がった。

「あんた、ずっとここのチャンプなんだって？ それにしちゃ大したことないじゃん」

余裕が出たのか、青年は目の前の対戦者を挑発する。にやりと笑った口元が、「ほら、かかって来いよ」と好戦的に吊りあがった。

「言ってくれるわね。じゃ、本領発揮しちゃうわよ」

てりこも闘いに上気した顔に快活な笑みを浮かべると構えを取り直した。腰だめにした両手で拳を握り、大きく息を吸うと、思いのほか静かにゆっくりと吐き出す。女性にしては上背である彼女の全身を、白く光り輝くオーラが纏った。

「でたつ。てりこねえさんのパワー全開！」

「こうなったらもう、向かうところ敵なしだ」

「一秒と持たないぞ、相手」

ギャラリが口々にはやし立てる。劣勢どころか一秒KOを予告された対戦者は、てりこの笑顔に込められた威圧的な雰囲気圧倒されつつも、このままではひけないとばかりに腰を落として右脚を引き、飛び掛るタイミングをうかがう。

対し、てりこは余裕綽々。軽くステップを踏み、手のひらを上に向けて腕を前に出し、指を内側に折り曲げて欧米スタイルの「いらっしやい」のサイン。

「かかってらっしやい、挑戦者さん」

挑発とはこうするものよといわんばかりの彼女に、若者は気合を

込めた声を吐き出しながら跳びかかった。

その、まさに一瞬の後。

青年は腹を押さえてうずくまっていた。

まばたき一つの間の出来事だ。ギャラリー達は恐らくてりこの攻撃を目で追うことは出来なかっただろう。ただ、彼女が右脚をゆっくりとおろすのを見て、ああ蹴りを放つたのだと理解できる。

挑戦者は何とか立ち上がるが、格闘の基本動作である構えもろくに取れていない。一歩下がったところで試合を冷静に見守っていたレフェリーが進み出て若者の状態を確認する。

二言、三言、言葉を交わし、レフェリーがてりこを呼び寄せる。

「勝者、他戸照子！」
ほかどてりこ

高らかに告げられた勝利の宣言に、てりこ 照子は笑顔で握りこぶしを高々とかかげた。観戦者達が勝利をたたえる中、照子は彼らに手を振りつつ、格闘大会の優勝賞金を主催者から受け取り、預けていた荷物を引き取った。

小さな大会なので、優勝者のセレモニーなどはない。闘いが終われば観戦者達は余韻に浸りつつ三々五々、帰っていく。

中にはチャンピオンである照子に話しかけてくる者もいる。照子はファンサービスとして軽く彼らの相手をする。

ギャラリー達が徐々に照子から離れていく中、すつ、と高身長の方が現れた。いくら他に目を向けていたとはいえ、気配を悟られなかったことに照子は驚きつつそちらを見る。

「優勝おめでとう、照子」

スーッ姿の見知った顔が微笑みを浮かべていた。

「結^{ゆう}。来てくれてたんだ」

照子の顔が格闘家のものから一女性のそれに変わる。しかし急に身を引いた。

「ん？ どうした？」

「ダメ。今近寄っちゃ」

「どうして？」

「汗臭いから」

さらに、すすすつと距離を保ちながら照子は手を前に突き出して結を牽制する。

「気にしないよ」

「わたしが気にするの」

「じゃ、これで汗拭いたらいいよ」

結は、どうして持ち歩いているのか、スポーツタオルを照子に投げて寄越した。

「よく持ってたね」

「おまえが今日大会に出るって言ってたから、念のため」

持ってきてよかっただろうといわんばかりの結を見上げて照子は笑う。本当は自分もタオルくらい持ってきているのだが、せっかくの結の好意を無にしないために彼のタオルを使うことにした。襟元に浮いた汗をタオルでぬぐうと、首の後ろで一つにまとめている髪が軽くはねる。後ろ髪が、ようやく「すずめの尻尾」状態ではなくなったが、まだまだ短めだと照子と思う。

更にタオルで顔を軽く押さえて、鞆の中からめがねを取り出してかけた。目は悪くないが、ファッショングラスとして愛用している、淡い赤の細いフレームのめがねだ。

「時間があるなら、食事に行かないか？」

そろそろいいだろうといわんばかりに結が照子にゆっくりと近づいてくる。少々汗をぬぐったところであんまり変わらないかとも思いつつ、そのせいでせっかく誘ってくれているデートをキャンセルなどもつてのほかだと照子はうなずいた。

「あ、でもいいところはダメよ。今こんな格好だし、着替えるところないし」

照子は苦笑いしてデニム製ジャンバーの襟をつまんでひっぱった。結とのデートと判っている時はブラウスとパンツなど、もう少しデパート向きの服装をしているが、今日はこの格闘大会に出るとあってラフスタイルに着替えていた。

「判ってるよ。ファミレスにでも行こうか」

結も軽く笑ってうなづく。俺はそんなこと気にしないのに、といわんばかりだ。

それは照子も判っている。結は照子のファッションにあまり拘らない。しかし照子は、結とつりあいの取れる自分でありたいと思っていた。

普段着でも大人な雰囲気なのにスーツなんて着ていると更にクールガイ度がアップするんだよね、と照子は心の中でつぶやいていた。結は照子よりも二つ年上で、もうすぐ三十になる。落ち着きがあつて当然といえる年齢だろう。

「結は車？」

「ああ。照子はバイクか」

「うん。ファミレスまでは別々だね」

どこの店に向かうのかを決めて、そこで落ち合うことにした。

バイクで走ること三十分近く。結と落ち合うことにしたファミリ―レストランは照子の家に近くにある。こっちまで来てしまえば職場の人達。大学の教授や職員、学生達にデート現場を発見されて後で冷やかされるといふ心配が少ない。しかし今度はご近所さんに見られる可能性が出てくるのだが。

この時間帯の道路は通勤のウターンラッシュで、結の車はまだ到着していない。こんな時、照子はバイクで走ることによつとした優越感を覚える。

駐輪スペースにバイクをもぐりこませ、ヘルメットをシートの下に収納すると、照子は店内に入る。つい辺りをきよろきよろと見回すが当然結はいない。ついでにご近所さんもないことを確認して、適当な席に座った。

結が来るまでの間、今日の大会での闘いを頭の中で思い起こして、一人反省会を開く。この動きにはこう対処するべきだった、ここでもう少し踏み込んで攻めたほうがよかったかもしれない、思いつ

く限りのシチュエーションを描く。

「おまたせ」

不意に頭上から声が降ってきたので、照子はそちらに顔を向ける。結がいつの間にかやってきて、向かいのソファに腰を下ろしてメニューを手に取るところだった。

咄嗟に腕時計を見ると、照子が入店してから十五分は経っていた。それだけの間、試合のことに没頭していたとは自分はやはり格闘が好きなのだと思う。

照子がアマチュア格闘家として大会に出ているのは完全な趣味だ。高校生の頃に格闘に興味を持ち、空手の道場に通い始めたのだ。

やがて九十年代に入り、日本は空前の格闘技ブームに沸いた。とあるプロの格闘家はその技とルックスのよさ、果てはトークの面白さで幅広い年齢層からの人気を得、格闘技に注目が集まると、世にプロアマ問わず格闘家があふれた。また、対戦格闘ゲームと呼ばれるビデオゲームもその波に拍車をかけたのだった。

やがてブームは文化へと定着し、最近では週末になると公園で格闘技大会などが開かれるようになってきた。照子は自らの腕を高めるべく、職場の近くの公園で開かれる大会に参加しているのだ。

新しい客の注文を取りにやってきたウェイトレスに結が食事を注文すると、照子も慌ててメニューをめくる。

「先に頼んでおけばよかったのに」

結はわざわざ照子が自分の到着を待っていてくれたのだと思っただけだが、照子にしてみれば考え事に集中していて注文どころではなかったのだ。しかしこれを言うとは格闘馬鹿だと引かれそうなので言わない。「うん、まあね」と言いながらメニューをあれこれと見る。

結局結と同じものを頼んで、ウェイトレスが行ってしまつと、照子は結の顔をじっと見て問う。

「結はいつ『まいかた公園』に着いたの？」

「決勝が始まる頃だよ。危うくすれ違ふところだったな」

「あ、じゃあ決勝は見てくれたんだ。初めてだよ、わたしの試合見てくれたの」

嬉しさと気恥ずかしさで、照子の声が少し上ずった。ほんのりと頬も上気する。

「ああ。極めし者の力を認められてるところって珍しいんじゃないか？」

「珍しいの？ わたしはあその大会しか出たことないから他は知らないんだ」

照子の問い返しに結はうーんと首をひねった。

「俺も詳しいことは知らないけど。あの力使ったら、同じ極めし者じゃないと相手にならないだろ？ きつと最後のおまえの蹴り、見えてた人いないんじゃないかな」

極めし者とは、照子が闘いの最後に使った力を持つ者を言う。体のうちに宿る「気」を特殊な呼吸法を用いて自在に操るのだ。極めし者の間では、その「気」を「闘気とうき」と呼ぶ。

極めし者はとても希少な存在だ。その呼び名とともに徐々に世間に存在を認められつつあるが、まだ夢物語のように語られることが多いようだ。法整備の方は近代の法にしては珍しくも一歩進んでいて、極めし者が起こす犯罪については明文化してきているらしい。それだけ極めし者が持つ力というものが強大なのだ。

「結は見てたんでしょ？ どうだった？」

照子が興味深そうに尋ねると結は微笑を浮かべた。

「手加減がうまいなと思ったよ。同じ格闘をたしなむ者でも闘気を持ってない相手なら下手すれば一発で病院行きだし」

「そりゃ、大会に出るんだから最低限のルールだよ」

照子の言葉に結は納得顔でうなずいた。

彼女とこうやって話が出来ると結もまた極めし者だ。学生の頃に護身術程度で合気道を習っていたそうだが、道場の師範に見込まれて闘気を扱う修行もしたのだとか。その話を聞いたのは、まだ付き合う前だった。照子が自分と似たような経緯で極めし者となった結に

興味を持って、話をするうちに二人の距離が縮まったのだった。

「そう言えば、今日は珍しく残業なかったんだね。二〇〇〇年問題対策は大丈夫なの？」

「ああ、今はまだ大丈夫。それよりもチャンスがあったら会いたいし急いで来たんだよ」

結は大手のシステムエンジニア派遣会社に勤めている。あと二年で西暦二〇〇〇年を迎えるが、古いタイプのコンピュータでは二〇〇〇年を迎えると誤作動を起こすといわれている。当然そのような問題が起こっては困るので、結の会社にはもうちらほらと、「二〇〇〇年問題」を解消できるようにしてほしいという注文が来ているのだそうだ。

「おまえの方こそ、大学はそろそろ新入生迎える準備で忙しいんだろう。大丈夫なのか？」

「うん。ぼちぼち忙しいよ。明日あさつての週末が終わったらいいよ、残業ばかりになると思う」

「学生課だもんな。一番忙しい部署だろ」

「千人ぐらいの名簿とか作らないといけないしね。あーあ、カメラの前に書類をおいたら読み取ってきちんとデータ化とかしてくれないのに。ねえ、そんなプログラム作ってよ」

照子が茶化して言うとは結も肩をすくめて「できるものならなあ」と応えた。

「結は、この週末は仕事なんだよね？」

「ああ。明日はきつと夜まで空かないよ。あさつては仕事の進み具合で、夕方からなら会えると思うけど」

また仕事か、と照子のため息をつきそうになったが、一番つらいのは本人だと思いなおしてぐっところえる。忙しい相手を好きになったのだから仕方がない。

「うん。じゃあ日曜日に夕食一緒に食べようよ。今度はちゃんとした格好するから」

照子の心境を知ってか知らずか、結は軽く笑ってうなずいた。

「けど最近、休日のデートってしてないね。こうしてご飯食べたりお茶したりとかは、まああるけど」

「ああ。今度きちゃんと週末が休みの時は、どこかに出かけようか」
「ほんと？ やった」

さて、明日あさつてはどうやって時間をつぶそうかと、照子は今から次のプチデートを楽しみに思う。

明日は土曜日で、公園では昼間から格闘大会が開かれるだろう。とりあえず明日はそれに出て気分転換とついでに優勝賞金をゲットしようかと照子はニンマリと笑うのだった。

ROUND 1 - 2

土曜日の午後。今日も温かな日差しに包まれた通称「まいかた公園」では格闘大会が開かれている。平日の夕方に開くものとは違い、半日近くかけて開催する規模の大きな大会だ。照子が出場する無差別異種格闘技戦以外にも、格闘技別、年齢や男女別のトーナメントも、エントリーが多ければ開催される。

やはり一番のメインは、誰でも参加できる無差別異種格闘技戦だ。このトーナメントは出場者が一番多く、また観客達も心待ちにしている。

まいかた公園は、大阪にある比較的大きな公園だ。少年野球なら十分に試合が出来るほどに敷地は広いが、遊具がほとんどないことから、以前は地元の子供連れや、球技を楽しみたい学生などがちらほらと利用するだけの公園であった。しかし三年前からアマチュア参加型の格闘大会が開かれるようになって、徐々にギャラリーが増えるようになってきた。照子が極めし者であることが、彼女がはつらつと闘う様が、人気の元になっている。

照子が長年チャンピオンでいるのは、彼女の格闘センスもさることながら、やはり極めし者であることが大きな要因だ。といっても最初から最後まで闘気を使った闘いでは面白くないので、ここぞという時にしか闘気は解放しない。誰に教えられたわけでもないのに、照子はエンターテイナーの素質があると言っている。

この大会に他の極めし者が参戦したことは、数えるほどしかない。極めし者が希少な存在であるのもさることながら、自分が極めし者であることを秘密にしている者も多いと照子は聞いている。そろそろこの公園の大会も有名になってきたので、極めし者がもう少し現れてくれないものかと照子はひそかに願っていた。

ちなみに、まいかた公園というこの呼び方は本来の名前ではない。ある日、大阪のラジオ番組にゲストとしてやってきた有名俳優が、

この公園のことを「まいかたこうえん」と読んでしまったために、この利用者が面白がってそう呼び始めたのが広がった。今では特に格闘大会においては、こちらの呼び方の方が定着している。

照子は今日の日中を、まいかた公園で過ごそうと、昼食を軽く済ませてやってきた。赤を基調とした排気量四〇〇ccのバイクは女性が運転するにしては大きめだが、身長百七十センチを少し越えている照子には不釣り合いではない。

日の光に映える赤のジャケットと、ヘアバンドのように細く折りたたんで頭に巻いた赤のバンダナが、まいかた公園での照子のいつものスタイルだ。平日の夜に開かれる大会は、職場で着替えるとおつてさすがに派手な色使いは控えているが、休日の大会では、照子はほぼこの格好でいる。

「あ、てりこさん。今日も出場ですか？」

中学生の男の子達が声をかけてくる。彼らは数ヶ月前から自称「てりこのファン」だ。

「うん。がんばるよ。応援よろしくね」

「はい」

照子がにこつと笑ってガッツポーズを取ると、男の子達も同じポーズで応えた。

続いて、高校生ぐらいの女の子も近くにやってきた。うつすらと茶色に染めたロングヘアを頭の上の方でひとつにまとめ、思わず可愛らしいと抱きしめたくくなるような愛くるしい顔に、ちょっと不釣り合いな大人びた化粧をほどこしている子だ。

この年頃の女の子が大人にあこがれて化粧をしたり、少しボディコンシヤスな服を着てみたりというのはよくあることだ。そのくせ、背に負ったりユックはファッションよりも機能性を重視しているようで、少し大きめでデザインも可愛いとは言いがたいものだ。

そういうところもまた可愛らしいと思え、照子にはっこりと笑う。「はじめまして、てりこおねえさま。友達に聞いて、おねえさまの試合を見に来ました。頑張ってください」

甘く鼻にかかったような声だが、それでいて凜とした響きもある。可愛らしさと気の強さを内包している声だなと照子は感じた。

「ありがとう。がんばるよ」

照子が応えると、女の子は嬉しそうに、はにかんで笑った。

（ああいう可愛い妹がいればなあ）

思わずいつもの癖でそう心の中でつぶやく。

どちらかという姉御肌な照子だが、妹はいない。二つ上の姉はもう結婚して家を出ている。両親と飼い犬、三人と一匹暮らしになって、ますます妹がいればなあと願う照子は、かわいいタイプの女の子を見るとついつい妹にしたいと思う。

「無差別異種格闘技戦に参加される皆様、エントリーを受け付けておりますー」

選手受付のテーブルの方から、拡声器を介した男の人の声が流れてくる。照子はそちらに振り向いてから、もう一度女の子を見た。

「あ、いかなきゃ。それじゃあね」

手を振ってきびすを返し、照子は受付のテーブルに向かった。列の最後尾に並んで、順番が回ってきたのは約十分後だ。

「てりこさん、こんにちは。てりこさんが出場されるなら、今日も一人勝ちかな」

顔なじみになった受付係の男性が愛想笑いとともに挨拶をしてきた。

「そんなことないよ。強い人がエントリーしてくるかもしれないじゃない」

受付用紙に必要な事項を記入しながら、照子は応える。

ざっと名簿を見ると出場者は今のところ三十名ほどだ。この中に極めし者がいないかなと照子は願っていた。

エントリー用紙に記入が終わると参加費の千円を払って荷物を預ける。といっても仕事帰りではないのでショルダーバッグの中身は、ファッショングラスを入れたためがねケースぐらいで、他はそう大した物が入っていないのだが。

大会を運営するのは、格闘好きボランティアの集まりだ。出場者が払う参加費はほとんど備品や消耗品、トーナメント上位者の賞金に費やされ、残ったわずかな額をスタッフが均等割りで受け取っている。時には赤字のこともあるようで、主催者が折半している。照子はそれを知っているの、スタッフの人達に「よろしく願います」の意味を込めて頭を下げた。

エントリーを済ませると、照子は人の波をかき分けて、試合がよく見えるポジションを探した。しかし今日は人が多く、バトルフィールドと観客席を区切るロープの周りには結構たくさん観客が陣取っている。

それならと、照子は周りを見回して、一本の木に目星をつけた。ここなら試合を見るのにちょうどいいと、照子は心の中でつぶやいて呼吸を整えた。彼女の体を白熱色の闘気がうつすらと包む。軽くかがむと、照子は助走も何もなしでジャンプして頭上三メートル近くにある太い枝に両手をかけた。逆上がりの要領で、枝を支点に体を持ち上げ、次の瞬間には枝の上に腰をすんと下ろしていた。「やっぱりよく見えるわね」

満足げに照子はうなずいた。枝の座り心地はなかなかよく、安定しているので闘気を具現化し続けておく必要はなさそうだ。だが不測の事態に備え、闘気の解放自体は続けておく。

彼女の全身を覆っていた白い光は見えなくなる。闘気は意識して強く解放しない限り目には見えないものなのだ。

やがて試合が始まる。照子が出場する試合は大会の最後の方なので彼女は枝の上でのんびりと観戦だ。

ああ、あの人いい動きしているな。などと目をつけた選手に心の中で声援を送りつつ、もう一つの目的である人探しのために目を動かす。

照子がアマチュア女流格闘家として大会に出場するのには理由がある。一つは、格闘が好きだから。そしてもう一つは人探し。まだ彼女が極めし者となったばかりの頃に野試合で挑んで惨敗した相手

だ。

相手の男の名前も、どこに住んでいるのかも判らない。ただ、この公園で出会って、挑み、負けた。その事実しかない。なので照子はこの公園をホームグラウンドとして活躍することで、またその男が現れないかと待っているのだ。

しかし「あの男」 名前が判らない相手を照子はこう称している。 と闘ったのも、もう四年前の話だ。もしかしたらもう会えないのかもしれないと照子自身、思わなくもない。だがやはり人が集まると照子は探してしまうのだ。身長百八十センチ近くの極めし者である「あの男」を。

試合も見つつ、「あの男」も探しつつと忙しい照子の目が、一人の若者に留まった。観客席の後ろの方を歩きながら試合を覗き見ている彼は、探している男ではないが極めし者だ。

（あれ、珍しい。あの人、闘気解放してる）

普段から闘気を解放している照子もまた「珍しい」部類だ。なので彼女は親近感と興味を持って若者を凝視する。

まだ二十歳になるかならないかと思しき若者の身長は百七十センチぐらい。短く切られた髪は真っ黒で、質素な服装と相まってとても実直な印象だ。体つきはそれほどたくましいというものではないが、格闘を長くたしなんでいる者独特の、姿勢のよさときびきびとした動きで、彼が猛者であることを優に語っている。

若者が、照子が座っている木に近づいてくる。ふと、青年の肩がぴくりと動いて、彼は振り返って照子を仰ぎ見た。照子の闘気を感じ取ったのかもしれない。遠くで見ていたよりも、目つきの鋭い子だというのが青年に対する照子の第一印象だった。

「こんにちは」

照子は笑みを浮かべて手を振ってみた。

すると青年は破顔一笑、手を振り返してきた。笑うと、とても人当たりのよさそうな顔になる。

「ども。何してるんですか？」

「試合に出るんだけど、それまで観戦だよ。よく見えるの、ここ」
青年は「なるほど」とうなずいた。

「あなたは？ 出場するの？」

「いえ。今公園に来たばかりなんですよ。初めて来たから、どんなものかなって思ってた」

「どんなもの、というのは大会のレベルのことだろう。その一言で、青年がこういった大会によく出ている、あるいはたくさん観戦しているのだと伺えた。」

「なんだ、がっかり。あなた極めし者でしょ？ ぜひ一勝負してみなかったわ」

「あ、やっぱりあなたも極めし者ですか」

青年の笑顔が更に輝いた。彼もやはり極めし者に遭遇するのは貴重なのだろう。

彼が自分を見上げたまま、首を軽く左右に振る。照子は、はたと気付いた。いつまでも枝の上から話するのは失礼と言うものだ。
「ちょっと待ってね」と言うと照子は枝から飛び降りた。危なげなく着地すると青年の真正面に立つ。

青年は照子が予想していたよりも少しだけ身長が高い。百七十五センチはあるだろう。柔和に笑う顔に、たくましさで誠実さがにじみ出ている。

「ごめんね、えらそーに枝の上から。改めてはじめまして。他戸照子よ」

「おれは富川信司とがわしんじです。よろしく」

にこにこ笑う信司は右手を差し出してきた。照子も笑顔で彼の手を取り、握手。

出来る。

手から伝わってくる闘気の強さに、照子の目がきらりと輝いた。それは信司も同じらしく、二人はにこーっと笑いながら握った手を軽く上下に振る。

「ねえ、もしよかったら」

「あー、もしよかったら」

手を離れた瞬間、二人の声が重なった。

「きつと言いたいことはおんなじね」

「そうだね。いいかな」

「うん。でもわたし、大会にエントリーしちゃったから、終わるの待ってくれると嬉しいんだけど」

「いいよ。今日は暇だし」

「オッケー。じゃ、試合はできるだけ早く終わらせてくるわ」

照子が応えるのと、彼女が出場を予定している試合の選手を呼び集めるアナウンスが、重なった。

そしてその日の大会は、いつもと違う盛り上がりを見せた。

照子はほぼ全ての試合を十秒以内に終わらせて、試合最速大会新記録を樹立した。もっとも、そのような記録を主催者が残しているなら、の話だが。

「てりこさーん。今日、どうしたんですか？ いつもは決勝ぐらいしか闘気解放しないのに」

主催者の男性が驚いて尋ねてきたほどだ。主催者側としては、もう少し「試合」になるような展開を期待していたのだろう。だが全試合、開始直後に一撃KOというのも、それはそれで話題になるものでもあるが。

照子は、両手を合わせて軽く頭を下げた。

「ごめんね。ちよつと予定が変わっちゃって。あ、そうだ。会場撤収する前に、一戦だけ、使わせてもらっていいかな」

「一戦、というと？」

主催者の問いかけに、照子はうなずいて、少し離れたところで待っている信司を手招きした。

「彼とやりたいのよ。エントリー終わってから来たんだって。場所区切っていないところでやってもいいけど、今日、人多いし危ないから」

照子は、お願い、ともう一度手を合わせて頭を下げた。傍にやってきた信司もつられるようにぺこりとお辞儀する。

主催者の男性は、少々渋るような表情を浮かべたが、うなずいてくれた。

「しょうがないなあ。いつも大会を盛り上げてくれている『赤き光のてりこ』さんの頼みだしな」

「ありがとう。頑張つていい勝負するよ」

久しぶりに極めし者と闘える。

照子は嬉しくて、思わず男性の手を力強く握り締めた。

「いててて、てりこさん、痛いっす」

「わー、ごめんごめん！」

穏やかな笑いが周り広がった。

ROUND 1 - 3

照子は信司とともに、広場の中央に向かった。観客席との仕切りであるロープをくぐり、これから熾烈な闘いが展開されるであろうバトルフィールドに足を踏み入れる。十メートル四方のスペースは、普通の格闘家には十分な広さだろうが、極めし者達が遠慮せずに力を振るうには、少々狭い。

二人はフィールドの中央に、二メートル程の距離を空けて向かい合った。

今日だけで五回、照子はこのスペースに足を踏み入れた。そのすべてが試合開始直後のKO勝ちという華々しい結果だった。だが今は違う。信司は照子が今まで出会って拳を交えてきた極めし者の中で、二を争う実力者だ。闘気の大きさだけみると照子自身と同等、あるいは少し上だと彼女は見積もっている。これに加えて格闘の腕前が伯仲していたら、間違いなく信司に分がある。

もちろん、技の相性などの他の要素もあるのだが、照子は苦戦必至と覚悟していた。

勝ちたい、と思う。だがそれ以上にこの闘いをできる限り楽しみたいとも。

照子が闘気の解放を強めると、信司もそれに習った。照子は白、信司は空色のオーラを解き放つ。体の近くでは白熱色に近いが、放出される闘気の色はその者が属する「属性」によって変わる。

「信司くんは風か」

「てりこさんは天だね」

「風の人とやるのは初めてだね。楽しみ」

楽しみだという照子の言葉に、信司も唇の端を持ち上げて笑った。二人とも、闘いを直前にして格闘家の表情になる。笑みを浮かべてはいるが、目は鋭く相手を見つめ、一挙手一投足を、いや、動くまでのほんの一瞬の間でさえも見逃すまいとしている。

両者は腰を落とし、それぞれの構えを取る。照子は両の拳を胸の前に掲げ、信司は脇をしめて拳を腹の横にすえている。

正式な試合ではないので、勝負の始まりを告げる者はない。相手の隙を突けるチャンスだと判断した瞬間に動き始める。

照子が距離を詰めようと、軸足に体重を乗せる。

そのタイミングで信司が地を蹴った。

先制攻撃を仕掛けようとしていた照子は、まさかの信司の接近に驚き思わず上体を後ろに引く。残った足に信司の蹴りが飛んできた。バックステップで回避を試みるも相手の方が素早さは上。足を払われ、照子はしりもちをついた。しかし次の瞬間には横に転がりつつ身を起こす。全身のバネを利用して起き上がるというよりは跳ね上がった。

照子はすかさず反撃。立ち上がるよりも早く拳を振り上げる。彼女が地に足をつける時にはもう拳は信司の胸元だ。

きっと予想外だったのだろう、信司はよけることができずに突きを受け、二歩ほど後ずさった。

照子は続けて攻撃はせずに、構えを取りつつ信司を見据える。信司も同じように照子を見つめ返してきた。

照子と信司が大きな動きを止めたことで、観客達はいっせいに、ほうとため息をつく。「見えた?」「何があつたんだ?」などと観客達はざわめいているのが照子の耳に届いた。

やはり照子が見たとおり、信司は強い。そして自分と同じように真剣勝負に挑みながらも対戦を楽しんでいる様子が伺える。きっと格闘家として彼とは気が合うだろうと照子は嬉しくなった。

しかし彼と話をするのは試合の後。今はまず拳を交えるという格闘家らしい交流を楽しもうと、照子は再び呼吸を整えて相手の隙を探った。

信司の闘気の放出がひととき大きくなる。次の瞬間、彼の姿がぶれるように見えたかと思うと、元いた位置よりも五メートル近く後方へと瞬間移動した。

さらに照子の左手、後方それぞれ二メートル程にも気配を感じる。分身か、と照子は瞬時に相手の超技ちようぎ 闘氣を使った特殊な技を察した。

「うわ」

「増えた！」

ギャラリーのどよめきが照子の直感を肯定する。

分身は厄介だ。闘気で造影された影はぱっと見ただけでは本人と見分けがつかない。凝視すれば見破ることはできるだろう。だがそんな隙を闘いの最中に作るわけにはいかない。

一瞬のうちに見分ける必要がある。

照子は迷わなかった。彼女の体から放出する闘気がひときわ強くなる。

大きく拳を振りかぶると、照子の足が地を蹴った。白く輝く闘気を纏わせた拳を突き出す。

照子があつという間に前方の信司に肉薄。拳は信司の頬を打つ、はずだった。

信司の姿が掻き消える。これは闘気の幻影だったようだ。

照子が振り返ると、彼女が元々いた位置に攻撃を仕掛けていた信司の姿がある。

すかさず照子は、右足に闘気を集めて蹴り上げる。放たれた白い闘気の塊が地を這っていく。

信司はすぐに態勢を立て直し、ジャンプした。信司の体が照子に迫ってくる。

超技の後の隙を狙うつつもりだろうがそうは行かないと、照子も振り上げた足を地に着け、すぐさま反対の足を振り上げる。

振り上げた足が空中の信司を確実に捕らえる。照子は確信していたが、さすが極めし者との闘いは期待を裏切り、裏切られることの連続だ。

信司はまるで空中に見えない板でもあるかのように宙を踏むしぐさをして更に高さで飛距離を伸ばす。照子の上を飛び越える時に、

二人の視線が交錯。

次の一撃で、フィニッシュだ。

超技をふんだんに盛り込んだ試合の決着を、二人とも、確信した。信司が着地する。二人はほぼ同時に相手に向き直った。

照子の拳、信司の右足に闘気が集まる。

ほぼ同時に動き出す格闘家達。

白熱色の闘気に包まれながら、服装の赤が目立つ照子は「赤き光のてりこ」の異名にふさわしい。対し、空色の闘気に包まれた信司は、まさに一陣の風だ。

二つの光が交錯しようとした、その瞬間。

「きゃああっ！ 離してえっ！」

耳をつんざく、甲高い悲鳴が会場の空気を切り裂いた。

耳に飛び込んできた悲鳴に、照子も信司も、勝負の重大な局面であるにも関わらず、思わずそちらを見た。

「ごっちーん！」

擬音にするときつとこう言い表されるであろう鈍い衝突音が、悲鳴の後を追うように会場に響いた。

「いいっ……、たああっ」

「うおおおお……」

照子と信司は頭を抱えてうずくまる。見事に互いの頭に頭をぶつけた二人はしばらく動けなかった。極めし者として不意打ちの一撃には弱かった。

「ご、ごめん……」

「いえ、お互い様です。でも今の布を裂くような悲鳴はなんだ？」

「信司くん、それを言うなら絹を裂くような、でしょ」

「あれ、そうだったっけ……？」

「それ、わざと？ それとも天然？」

「何が？」

「……うつん、もういい」

などと言い合いながら照子と信司はなんとか立ち上がった。

悲鳴のあがつた方を見ると、人垣がその部分だけひいている。その不自然に作られたスペースの中にいるのは、十代半ばと思しき女の子と、いかにも柄の悪そうな青年が三人だ。

男のうちの一人が女の子の手首を取っているが、女の子は嫌がって腕をぶんぶん振っている。

あれ、見たことあるかも、と照子は女の子を見て思った。

しばし記憶を探って、思い出した。大会が始まる前に応援にやってきた女の子だ。妹にしたいなあと思わずつぶやくほどに可愛らしい女の子。

「あれ、あの子……」

照子がつぶやくと、信司が反応する。

「知ってる子？」

「今日知り合ったのよ。試合前に声かけてきて……。まあでも、あの雰囲気は知り合いでなくても、何とかしてあげたいわね」

照子の言うように、女の子と男達の間空気は最悪だ。男達が女の子を無理やり連れて行くようになっているように見える。

周りのギャラリイ達は困惑顔だ。突然のアクシデントに戸惑っているようだ。それに加えて、ゆゆしき状況だが関わりたくはない、といった心理も働いているのかもしれない。男達は言葉よりも手が出るタイプに見えるので、それは照子にも納得できた。

何とか男の手を逃れようとしながら、女の子が照子の方に振り返る。

目があった。

可愛らしい瞳が、ウルウルと揺れている。

「……てりこねえさまっ。助けてっ」

あの、甘えるような鼻にかかった声で、助けを求めてくる。

照子には、もうそれだけで放っておけなくなった。

「ごめん信司くん。この勝負、一旦預けるよ」

信司にことわりを入れて、照子は女の子の方に歩いていった。

「助けて、って、どういう状況なの？ その人達は……」

「うるせえよ。こつちの事情に首突っ込んでくるんじゃねえ」

女の子よりも先に、男の一人が答えた。いや、声色や目つきからして、すごんだと言ふべきか。首を傾けて斜めから見るようにして睨んでくる。テレビのヤクザものを間近で見た気分だ。

うわ、怖っ、と照子は思った。いくら肉体において頑強な極めし者でも、照子は犯罪者などとは無縁の生活をしている。もしも相手がヤクザだとしたら関わりあいにはなりたくない。

「その事情が判らないから聞いてるんですよ」

後ろから声と気配が近づいてくる。信司もやってきたようだ。彼は落着いた様子で言葉を続ける。

「助けて、っていうくらいだし、あんまりいい雰囲気じゃないよ。なんにしても乱暴はよくないよ」

「だから、おまえらには関係ねえって言ってるだろうが。このお嬢さんは」

男の言葉をさえぎって、女の子がありったけの声で助けを求めた。「この人達、もうしっこくてしっこくてっ。何度も連れ去られそうになってるんです。助けてください!」

その声に男達は「ええ?」などと声をあげてひるんだ。

男達はストーカーか、もしかすると人攫いなのかもしれない。照子は思った。きっとそれなりに腕に自信があるから、こんな人前でも女の子に手が出せるんだろう。

確かに男達の雰囲気は、おいそれと首を突っ込めるものではない。でも、それでも、この子を放っておくなんてできない。照子は、瞬時に決断を下した。

照子は少女の手をつかみ、男の手を振り払わせた。そのまま彼女の手をひっぱって走り出す。

男達は突然のことであっけに取られていたようだ。だが連れ去ろうとしていた少女を奪われたことに気付くとわめき声を上げながら追いかけてくる。

照子一人なら逃げるのは何の苦もない。だが連れている少女を気

遣いながらなので、徐々にその距離は縮まってくる。

このままでは捕まる。

仕方がない。追いつかれたら、極めし者の力を使っても逃げよう。

照子がそう思った時。

「うわあっ」

男達の悲鳴が上がった。

照子がちらりと後ろを振り向くと、地面に突っ伏した男達のすぐ傍に信司が立っていた。

「やー、せっかく解放した闘気、まだ残ってたからさー」

呑気な信司の声が聞こえた。伸びている男達をひよいと飛び越してやってくる。

どうやら超技用にためておいた闘気を男達に放ったようだ。照子にはあっけに取られた。

「闘気使えない相手に、先制攻撃はまずいよ、信司くん」

「だって明らかにあいづら悪いから。誰も文句言わないって」

「……聞かなかったことにするね」

刑法では極めし者が他人に対して力を行使することに制限を設けている。公式に認められている試合以外では、身の危険を感じるような状況でなければ使ってはならない。公式な大会でなければ、たとえ本人同士が同意していても、第三者がその勝負を行うことを認めなければ、極めし者としての力を使ってはならない。

照子はそれを知っているので信司を咎めたが、心情的には信司に同意していた。

「助けてくれてありがとう、てりこおねえさま」

女の子が、ぺこりと頭を下げた。

「どういたしまして。とにかく、怪我なんかなくてよかったよ」

照子の返事に、女の子の笑顔が輝いた。

「嬉しいっ。もう、てりこおねえさまに一生ついていきますっ」

「あはは、それは大げさだよ。とにかく、ここから離れて、これか

「らのことは安全な場所を考えよう」
照子の提案に女の子と信司はうなずいた。

ROUND 1 - 4

まいかた公園の駐輪場で、信司は愛車のバイクにまたがりエンジンをかける。黒の四〇〇ccのバイクだ。照子が同じ排気量のバイクに乗るとあって、少し驚くとともに親近感を覚えた。

ひよんなことから照子と、彼女のファンである女の子と行動を共にすることになった。もちろん、女の子が窮地に立たされているらしいので協力することは、やぶさかではない。

女の子は照子のバイクに乗せてもらっている。照子のマシンに乗れるとあって少女はとても喜んでいようだ。

この季節はまだバイクで走るには少し風が冷たい。だが信司は季節を問わずにほとんどバイクで移動する。好き、というのもあるし、彼にとつて一番便利な移動手段だからだ。

まいかた公園からバイクでおよそ二十分ほど奈良より走ったところ、小さな公園があったので、そこで休憩することになった。

駐輪スペースにバイクを並べて停め、公園の中に入ってベンチに並んで座る。

信司から見て、照子は極めし者ということを除けば、普通に格闘好きの女性のような気がする。しかし、彼女に寄り添うようにして座る少女は、只者ではないような気がする。

（そう言えば、あの時、あの男の人はこの子のことを「お嬢さん」って言うてなかったっけ？）

信司は十九歳という歳のわりには、様々なことを経験している。ヤクザ者にも知り合いがそれなりにいるが、彼らは自らが忠義を尽くす相手にはとても物腰が柔らかい。

男達は、確かに少女の手を掴んでいたが、少女が嫌がつて腕を振っていただけで、男達は強引に連れて行くというそぶりでもなかったかもしれない、今になって思う。

「ねえ、これからどうしようか。やっぱり警察に相談するほうがい

いかなあ」

照子が話しかけてきたので、信司は彼女に視線を向ける。照子は少女のことをとても心配しているようだ。

「そうだなあ、そのほうが」

「ダメですつ。さつっ、警察はっ」

信司をさえぎって少女が慌てたように両手をぶんぶん振り回す。「どうして？ ストーカーなんだったら警察に相談しなきゃ。放っておいたらエスカレートしちゃうよ？」

照子が小首をかしげると、少女は困ったように少しうつむいた。「だって、ほら、警察ってストーカーぐらいじゃ相手にしてくれないし。警察に言ったら知ったら相手が余計にしつこくしそうですい……」

決まりが悪そうな少女の言葉に、やはりこの子は只者ではないと、信司は確信した。でもったふうにも聞こえたが、警察のことを指す俗語の「サツ」と咄嗟に言ってしまったのだろう。

「まあ、本人がいやだと言ってるんだから、別の方法を考えようよ」
信司が助け舟を出す。

彼は中学生の頃に家を飛び出して、日本全国様々な箇所を点々として、まさにサバイバルとも呼べる生活を送っていた。長期の家出というよりも逃避行に近かった。危ない橋を渡ったこともある。なので窮地に立たされた人の心情は痛いほどよく判る。警察に知られたくないのなら、ぜひとも自分達で何とかしたいと信司は思った。

少女は、信司の気遣いを嬉しく思ったのだろう。口元をほころばせて「ありがとう、お兄さん」と言って頭を下げた。

「でも……、警察に行かないなら、どこに行こうか。いつまでもここにいてわけにもいかないでしょ？ えーと、あ、まだ名前聞いてなかった」

照子が女の子を見て問う。

「名前……。わたし、あやめっていいます」

少女は少しためらったが、まさに「名前」を名乗った。

「あやめちゃんか。可愛い名前だね。あなたにぴったりよ」

「ありがとうございますつ。わたし、六月生まれで、おかあさんがあやめが大好きで。それで、花言葉が嬉しい便りっていう意味なんだつて。おかあさん、わたしがおなかに宿つてとっても嬉しかったつて、つけてくれたのっ」

名前を褒められて、少女、あやめはとても嬉しそうに笑った。照子もそんな彼女をにこにこで見ている。

「お母さんが好きなんだね」

「うん。……もう死んじゃったけど……」

途端に少女の顔が曇る。照子も、まずかったかなという顔をしてあやめを見つめた。

「あー、おれは富川信司だよ。これからのことだけど。とりあえずおれが滞在しているホテルに行かないか？」

とりあえずその場の雰囲気を変えようと信司が提案すると、照子が小首をかしげた。

「ホテル、つて、信司くんつてホテル住まい？」

「いや、そういうわけでもないよ。実家は京都にあるし。でも、仕事で全国回つてるから、こつちでの滞在でも短い間はホテルにするんだ。ちょうどホテルの近くで次の仕事があるから」

「学生さんかと思つてたけど、働いてるんだ。信司くんつていくつ？」

「十九だよ」

二人の会話にあやめが小さくつぶやいた。

「いいなあ。わたしも早く働きたい。早く家を出るの……」

その、早く出たい家というのは、やはり暴力団関係なんだろうかと、信司が思つた、その時。

只者ではないらしい少女よりも、さらにただならぬ気配が近づいてきた。照子も気付いたらしく、顔を上げる。

「見つけたで。あのスケヤろ」

典型的なヤクザ言葉を強調させて、男が三人ばかりやってくる。

まいかた公園であやめの手を掴んでいたのとは違う連中だ。雰囲気どころかいでたちも無頼漢そのものだ。

「おまえら、どいてろ。その女に用がある」

男が信司と照子に目を向けて言う。さすがに仲間内で話しているような口調ではないが、威圧感たっぷりだ。

「どけ、と言われてもね。この子は友達だし、今おれ達と話してるんだ。……どんな用ですか？」

「おまえらには関係ないわ！ どころかと痛い目に遭うで！」

男の本性丸出しの怒号とともに、三人がいつせいに懷に手をやった。

引き抜かれた時には、それぞれの得物が握られている。ヒ首が二本と、拳銃だ。

「じ、銃っ」

「チャカツ」

「ハジキッ」

照子、あやめ、信司の声が同時に出た。

「……チャカ？」

少女の口からそのような言葉が飛び出たことに、さすがに照子も疑問に思ったようだ。

「えっ……？ あっ、ほらっ。テレビドラマでよく、ピストルのことをそんなふうに言ってるじゃないですか。わたし、影響受けやすくて」

照子の視線を感じて彼女を見たあやめは、あはは、などと乾いた笑いを浮かべつつ言い訳をしている。

信司もハジキなどと言ったのだが、照子はその辺りは気にしていないらしい。それこそ任侠もので知ったのかと思われているのかもしれない。

照子は、まあいいわ、などと小さくつぶやいて、男に向き直った。「あなたたち、そんな物騒なもの、しまわないと後悔するよ」

照子が男に言う。なんだか意味が通っていないように思えるが極

めし者が二人いることを考えれば理解できる。

「あん？　なんだとコラ」

照子が武器を怖がって支離滅裂なことを言っていると思ったのだろうか。男は口元をにやつかせながら手にした匕首をぶらぶらと振って見せた。普通は武器を見せるだけで、相手はかなりひるむものだ。照子もそうなのだろうと男は高をくくっているようだ。

「信司くん。これって、命の危機よね？」

「うん。なにせドス二本に、銃だもんね」

「じゃあ、身を守るために、仕方ないよね」

「うん。仕方ない、仕方ない」

照子と顔を見合わせて、思わずうんうんとうなずいた信司。

「それじゃ、いこっか」

照子の言葉に信司は声なくうなずいて闘気の解放を強めた。同じく照子も闘気を放出させ、二人の体から空色と白熱色のオーラが噴き出る。

男達は闘気に気付いて驚いた表情を浮かべるがもう遅い。

信司が手近な男の腹を蹴り、照子がもう一人のすねを蹴った。あわれ最後の男は同時に振り返った信司と照子の蹴りと突きをひざとあごに食らった。残り者が損をした。

「きゃー、てりこねえさま、かつこいいー」

あやめは瞳にハートマークを浮かべたかのようなうっとりとした目で照子を見てはしゃいでいる。

「おれもやつつけたんだけどなあ」

「え？　あ、信司さんもお疲れ様です」

途端に冷めたあやめの口調。

扱いの極端な差に信司は思わず「あはは」と苦笑を漏らした。

「とにかく、行きましょ。信司くんの泊まってるってホテル」

照子が二人を促した。さすがにかなり手加減をしたので、男達が起き上がるようになるまでそう大した時間は必要としないだろう。駐輪場へ早足で向かいながら、信司はホテルの名前と位置を照子

に教えた。

大阪から奈良へと向かう大きな国道で、信司は男達に必要以上に手加減を加えたことに少しだけ後悔した。

信司が滞在しているホテルは奈良市内にある。なので大阪から奈良に繋がる国道を経由して市内に入ろうとしていた。その道中、行程の半分ほどに差し掛かった時に、白の高級車が二人のバイクに追いついてきた。

車の窓が開き、先程、のしてきた男達が顔をのぞかせてなにやらわめいている。ヘルメット越しでよく聞き取れないが、罵りの言葉であることは間違いなさそうだ。

その言葉の中で、止まれという意味のフレーズが聞き取れた。もちろん後ろには、お子様には聞かせられないような口汚い言葉もついてきている。

止まれと言われて止まるぐらいなら逃げはしないよと心の中で舌を出しつつ、信司はわざと男達の車のまん前に陣取ってやった。照子のバイクがさっさと逃げられるようにするためだ。

照子も信司の意図を察したらしく、ある程度の加速はする。だが後ろにあやめを乗せているので無茶な走りはできないのだろ。振り切るには至らない。

国道が、県境の山道に差し掛かる。この先、できるだけカーブがないようにトンネルを作って整備した本道と、八年前、一九九〇年まで本道として使われていた、山をぐねぐねとめぐる旧道がある。もちろん本道の方が交通量は多いが、早く奈良に到着する。

照子はてっきり、本道を通ると思っていたが、ウィンカーを出して旧道へと入っていった。なので信司も彼女に続く。当然後ろの車も追いかけてくる。

急カーブが続く坂を、照子のマシンは絶妙のコーナリングで上ってゆく。あの安定した走りからして、恐らく後ろに女の子がいなければもっとスピードを出しても大丈夫なのだろう。後ろのあやめは、

しっかりと照子の腰にしがみついている。

なるほど車よりもバイクの方が小回りが利くのでカーブを利用して振り払おうという算段か、と信司は感心した。

バックミラーを見なくても、男達の車がすぐ後ろまで迫っている気配がする。エンジン音に負けないぐらいの怒号がまだ続いている。こっちはこっちで大した根性だなど思いつつ、彼らの運転もひと気がないことで遠慮がなくなっていることに気付く。このままでは信司のバイクを跳ね飛ばしかねない勢いだ。

ふと、信司は考えた。

ざっと見る限り、他に車はない。追跡者は遠慮を知らない。やられる前に、やってやれ。

ああ、このバイク、まだ買って二ヶ月なのに、とか、また周りに呆れられるな、とか、思わなくもなかったが、信司はこの危機的状況を乗り切るにはこれしかないと思った。

(二ヶ月間、ありがとう！)

心の中で愛車に感謝の言葉を叫びつつ、信司は闘気を解放した。

次の瞬間、彼の体が宙に飛び出す。

怒号を上げていた男の、一瞬青ざめた顔が眼下に見えたと同時に、信司のバイクと男達の車が派手な衝突音をあげた。

超技「感」を使って宙を踏み、飛距離を伸ばす。信司のバイクを巻き込んで停車した車から四メートル程前方に着地した。

「ちよ、つと、信司くんっ。何やってんのっ！」

信司から更に十メートル程前方に照子がバイクを停めている。

「先に行つて。ロビーで待っててよ。あいつらもう一度たたんだらすぐに向かうから」

「足止めはありがたいけど、バイク……」

「ああ、こんなこと珍しくないから気にしないで」

照子は何か言おうとして「あー、あ、えっと」などと言っているが、どうやらあきらめたらしい。

「判った。気をつけて来てね。あと、やっぱりある程度の手加減は

するんだよ」

照子の言葉に信司がうなずくと、彼女のバイクは信司を置いて再び走り出した。

さすがにこんな状況で、信司のことが気になったのか、後ろのあやめがちらりとこちらを見たが、軽く手を振ってやると前を見て、もう振り返ることはなかった。

そのころになって、前方がひしゃげた車から男達が這い出てきた。

「こ、このガキ……。なめたまね、しくさりよって」

かなりお怒りの様子だ。まあ高級車をおしやかにされたのだから当然だろう。

「あれ、止まれとか言ってたの、あんたらだろ？」

信司がとぼけてみせると、さらに男達の怒りのボルテージが上がった。今度は全員が拳銃を取り出している。

「罪なき市民に銃なんか向けるやつには、それなりの仕置が必要みたいだね。今度はさつきより手加減しないよ」

意図的に車を破壊したことや、挑発をして銃を出させたことは、この際、棚上げだ。

照子達に向けていたにやかな表情を消し、にやり、と口元に笑みを浮かべた信司は、空色の闘気を解き放った。

ROUND 1 - 5

照子はやめを連れて、奈良市内のホテルにやってきた。ホテルのランクとしては中の上で、奈良駅から徒歩圏内とあって、宿泊客がわりと多めのホテルだと照子は聞いたことがあった。その評判に見合った数の人達が出入りしている。

ホテルのエントランスをぐぐり、照子はまずフロントに向かう。「すみません。こちらに宿泊している富川信司さんの連れの者なのですが、彼は戻られていますか？」

フロントの男性に話しかけると、宿泊者名簿と預かってある鍵を照らし合わせてチェックしてくれた。

「富川様は、まだお戻りではないようです」

「そうですか、ありがとうございます」

ぺこりと一礼し、あやめと一緒にロビーのソファに腰掛けた。

「このホテルで間違いないみたいね。よかった」

照子が、やれやれとソファの背もたれに体を預けると、あやめも「はい」と応えて同じような姿勢になった。

落ち着いた色のライトに照らされたロビーを見回し、ふと時計を見ると十七時を回っている。まいかた公園での格闘大会が終わるころはまだ明るかった景色も、日が落ちていくと急激に紺色に吞まれて行く。立春を過ぎたばかりなので、まだ日暮れは早い。

ここまでの道中を思い出して、照子はいいため息をついた。

「あー、でもびっくりしたわ。まさかバイクをぶつけるなんてね」
国道で信司が見せたバイククラッシュは、照子にとってとても衝撃的であった。ああいうのはアクション映画の中だけだと思っていたのに、まさか本当にやる人がいるとは。しかも信司の口ぶりだと、頻繁にバイクを壊しているようだった。

もしかして信司はどこかの御曹司なのかしらと照子は首をひねった。バイクをしょっちゅうお釈迦にしても困らないだけの収入があ

るのかもしれない。

しかし泊まっているこのホテルはそれほど高級というわけでもないし、信司自身の身なりも普通だ。

ああひよっとしてお忍びの御曹司？　などと照子の思考のベクトルが面白い方に向き始めた。

「信司さんって面白い人ですね。てりこおねさまのお友達なんですよ？」

隣のあやめが尋ねてくる。

「お友達というか、今日会ったばかりなのよ」

照子は信司との出会いを話して聞かせた。

「それにしても、息が合ってたね、さっき」

公園で男達を叩き伏せた時のことだろうか。そういえば初めての共闘にしてはやりやすかったなと照子は思う。信司とは、格闘家として相性がいいのかもしれない。といっても誰かと一緒に闘うということ自体、照子にとってはあまりないことなので、誰と気が合うのか合わないのかもあいまいなのだが。

「そうだね。でもあんな闘いはもうないほうがいいなあ。ちょっと怖かった」

暴力団ふうの男達を相手にしたことは、今思い出すと身震いを誘う。極めし者でアマチュア格闘家と名乗っていても照子はアンダーグラウンドとは無縁なのだから。

「そうですね」

相槌をうつあやめは、どことなく寂しそうな表情に思えた。高校生の女の子の表情にしては大人びている。

そう言えば、なぜあの男達はこの子を追いかけてきたのだろうか、と照子は根本的な疑問を今更のように思い浮かべた。

まいかた公園で見た男達は、ちよつと気の強いストーカーのようだが、一休みしていた公園で相手をした男達は明らかにもつとたちの悪い害意を持っていた。

しかしいくら照子が考えても判らないことだ。ならば本人に直接

聞くのが早いかと、照子はあやめにしっかりと顔を向けて尋ねる。

「ねえ、あやめちゃん。どうしてあんな怖い男達に追いかけられていたのか、判る？」

「え？……それは、判りません」

あやめは戸惑いの目を照子に向けた。照子が見たところ本当に解らなさそうだった。

いたいけな女の子を追い掛け回して危害を加えようなんて許せない。姉御肌な照子は未知の男達に憤慨する。

「これからのことは、信司くんが来たら相談しようか。あの人、なんだかいろいろと詳しそうな雰囲気だし」

先程は信司のことをお忍びの御曹司かと思っただけだが、考えてみたら、暴力団員ふうの男達を前にしても信司はやたらと落ち着いていた。極めし者だからという自信だけではありえないと思う。

まさか、どこかの組の若？ と、またまた信司の素性に対する考えが変なほうに傾くのであった。

「はい。でも信司さん、どうやってくるのかな……」

そういわれてみれば、信司は山の中で交通手段を失ったことになる。ふもとまで行けばまだバスもそれなりの本数が走っているのだが、山道を降りるのも一苦労だろう。一体何時ごろにここにやってこれるのだろうか。

「時間かかりそうだなね。お茶してよっか」

照子の提案に、あやめは嬉しそうにうなずいた。

照子達はホテルのロビー横にある喫茶店に腰を落ち着けた。

信司がいつ来てもいいように、ロビーが見える席に陣取って、外の喫茶店よりはちょっとお高いけれどおいしいケーキセットを食す。その間にも、あやめは照子にいろいろと質問を投げかけてくる。格闘を始めたきっかけとか、家族のこととか、仕事は何をしているのか、など。

会話が途切れそうになると、次の質問を急いで投げかけてくるよ

うな感じがする。純粹に照子に興味を持っているのもあるのだろうが、そうやって質問をする側に回ること、あやめは自分のことを詮索されないようにしているのではないかと、ふと照子は思った。それならば、今はなにも聞かないであげようかと照子はあやめの質問に答えるのみにした。

「てりこねえさまって、モテるんじゃないですか？　だって、優しく、強くて、かっこいいし」

ショートケーキをおいしそうにほおばって、あやめはニコニコ顔だ。

紅茶のカップをソーサーにおいて、照子は「あはは」と笑いながらかぶりを振った。

「もてないよ。いい人どまりなんだよ、わたしは。男友達も結構いるけれど、ぜんぜんそんな雰囲気にならなかったよ」

「じゃあ彼氏は？　ねえさまのことを教えてくれた友達は、いるんじゃない？　って言うてましたけど」

その友達は結と自分が一緒のことを見たのだろうかと照子はどきりとした。やはりデートはあまり見られていて欲しくないものである。

「うん、彼氏はあるよ。でも今の彼と、元彼は一人だし、モテるって人数じゃないよね」

あやめは「へえー」と言いながら意外そうな顔で照子を見た。二十代後半の女性にしては少ないとでも思っているのかもしれない。

青春を格闘に捧げてきたとまでは言わないが、やはり男性とお付き合えるよりは格闘技に興味を惹かれていたのも事実だ。結の前に付き合った男と出会うまでは、両親、特に母親があきれていたほどだ。もしも今、結という彼氏がいなければ、お見合いなんてものを考えられていたのかもしれないと照子はちよっぴり苦笑を漏らした。

「彼氏さん、どんな人なんですか？」

「んーと、背が高くて、一見クール系だけど、結構あったかい人な

んだよ。変に面白い面もあるし」

「わあ、それって結構ポイント高いですねっ。自分にだけしか見せない内面、みたいな感じ」

あやめの羨望のまなざしに、照子はちよつと褒めすぎたかなあと思った。のろけだけでは親ばかならぬ恋人ばかりだ。

「でもね、忙しいからあんまり会えないんだよ。わたしより仕事とお付き合ひしてるんじゃないかしら」

照子が大げさに肩をすくめると、あやめは不満そうな顔をした。きつと結に対してのものだろう。ころころと表情を変える女の子は見えていて微笑ましい。

「てりこねえさまを放っておくなんて、彼氏さん何してる人なんですか？」

「SEだよ。今忙しいんだって」

「SE？」

「システムエンジニアだよ。コンピュータ関係のお仕事」

あやめは、ふうんと相槌を打った。あまり良く知らないのだろう。といっても照子も、コンピュータのプログラムなどを作ってるぐらいの知識しかないのだが。

「ねえさまは大学の職員さんでしょ？ どうやって出会ったんですか？ お友達の紹介とか？」

「ううん。彼氏がうちの大学に仕事で来たのがきっかけ」

照子の勤めている大学に、結がSEとして派遣されてきたのは二年前の春だった。結の第一印象は「冷たそうな人」だった。しかし話すうちに、彼は人付き合いがちよつぱり苦手なだけで、実は温かみのある、また、面白みもある人だと照子は思った。

結の派遣期間が終わりに近づいてくると、照子は結に会えなくなるのがとても寂しいことだと思うようになった。そして、彼に心惹かれていたことを自覚したのだ。

勇気を振り絞ってお付き合ひしてほしいというべきだろうかと思っていた照子だったが、思いもよらず、結の方からアプローチがあ

った。デートに誘われ、その初めてのデートの日に告白された。付き合っただけと言われた時は、照子はもう天にも昇る気持ちで、即答でうなずいていた。

もうすぐ付き合い始めて二年になるが、いまだにあの日の喜びは昨日のことのように思い出せる。

「ねえさま、顔がすごくニヤけてます」

あやめが鋭くツツコミを入れた。

言われて、照子はわざとらしく咳払いをひとつして、居住まいを正した。

「でも、ねえさまの意外な一面を見せていただけて嬉しいです。ねえさまにそんな顔させる彼氏さん、会ってみたいなあ」

意外な一面というが、今日出会ったばかりで意外なものもないだろうと照子は思ったが、きつと友人に前情報をいろいろと吹き込まれたのだろう。さぞかし勇ましいだけの女と言われていたに違いない。

「うーん、忙しい人だからねー。でも機会があったらまあ会ってやってよ」

照子が肩をすくめると、あやめは「はい」と元気よく返事した。

ふと、照子の視界の隅に信司の姿が見えた。ロビーを歩きながら辺りを見回している。

「あやめちゃん、先にロビー行つて。信司くん来たから。わたし、お会計してから行くし」

照子は伝票を手に立ち上がる。あやめはうなずいてロビーへ小走りで行った。

信司と合流して、照子達はすぐに彼の宿泊している部屋へと向かった。

部屋は五階にあり、もしもここに追っ手が来ても外からはちよっかいを出されないうと照子は安心したが、すぐに、それは出口である扉を抑えられれば自分達にも逃げ場がないということだと気が

付いて不安になる。

部屋の中は、若い男性が泊まっているにしては片付いているなと照子は思った。信司は几帳面なのかもしれない。

「早速だけど」椅子に座るなり信司が話を切り出した。「あやめちゃん、一旦おうちに帰ったほうがいいよ」

急な路線変更の提案に照子は驚く。もちろん、あやめが家に帰るのは賛成なので何も言わずにあやめの返事を待つ。

しかしあやめはその案には難色を示した。

「家、って、信司さん、どうして？」

まるで「わたしのことを判ってくれてたんじゃないの？」といわんばかりの、すがりつくような目で信司を見ている。

「あの追っかけてきた連中からいろいろと聞いてね。それで探偵やってる兄貴に確認したら裏が取れたから。あやめちゃん、家出してるんだろ。偶然だけど、兄貴んとこにおうちの人から探してくれて依頼があつたんだよ」

探偵？ と照子は首をかしげた。これで信司が暴力団の若だという説は否定されたわけだ。いや、照子とて本気でそう勘ぐっていたわけでもないが。こわもての男達を相手に肝が据わっているあたり、案外似合っそうかもしれないなどと、ちらと考えたことは内緒にしておこうと思った。

それよりも、あやめが家出をしていることの方が今は重大だと照子はあやめを見つめる。

家出といわれて納得するのが、彼女が持っている大きめのリュックだ。おしゃれに気を遣っている女の子が持つにはアンバランスだと思っていた。ひょっとしてしばらくは帰らないつもりで、持ち出せるものをあのリュックに入れて出てきたのだろうか。

あやめは、二人に見つめられてもじもじと手を組み合わせ、目を泳がせる。まさかこの段階で急に家出のことがばれるとは思っても見なかったのだろう。

「じゃ、じゃあ、もしかして、うちのこと……」

あの、小動物が庇護を求めるようなウルウルとした目で、あやめが信司を見上げる。

「うん。どうしてあやめちゃんが男達に追いかけられてるのかも

」

「判った！ 判ったからあ！ それ以上言わないでっ」

あやめは両手をぶんぶん振り回して信司の言葉をさえぎった。

「あやめちゃん、追いかけてる理由、知ってたんだね」

照子は少しだけがっかりした。嘘をつかれたことにもだが、あやめが知らないと言った時、それが嘘であると見抜けなかった自分に。「あ、違いますっ。えっと……。その、ごめんなさい。まいかた公園の方は、知ってます。でも、でもっ、途中の公園に来た人達のこととは知りませんっ。だからっ」

あやめは言葉を詰まらせながら照子を「ウルウル瞳」で見る。

（うわ、ずるいよその目。……ああわたしも可愛い女の子に弱いなあ、って、これって男の思考？）

あやめの視線攻撃にすっかりやられていることを自覚して、照子はがっくりと肩を落とした。

「あー、詳しくは言えないけど、途中から追いかけてきた奴らのことをあやめちゃんが知らないのは本当だと思うよ。とにかくあやめちゃんを家に送ろう。詳しい話はそれからだよ」

信司は照子のショックを知ってか知らずか、ひとりで「うん、それがいい」と言わんばかりにうなずいている。

あやめの家出の理由や、追いかけてきていた男達のこと、すべてが明らかになるなら、なによりあやめが無事ならばと、照子もうなずいた。

ROUND 1 - 6

駐輪場に来て、照子は驚いた。信司がキーを入れたのが、とても古いタイプのスクーターだったから。前のマシンとのギャップが激しすぎる。

「ああ、これ。山を降りて近くの中古屋さんに行ったら、すぐに売れるのがこれしかないって言われたから」

照子の視線に気付いて信司が笑う。

「それじゃ、おれが先に行くからついてきて」

「信司さん、うちの場所判るの？」

「住所は聞いたから、大体の行き方は判るよ」

照子からヘルメットを受け取りながらあやめが尋ねると、信司は自信ありげにうなずいた。

住所を聞いただけでルートが判るとは、信司はよほど走り慣れているのだろう。感心しつつ照子も愛車のエンジンをかけた。

信司の新しい、といってもお古のマシンは、排気音にも年季が入っている。これでこの先、目的地までちゃんと走れるのかと照子はひそかに不安に思っていた。

そしてその心配は的中してしまった。

大阪に入ってしばらく走ったところで、信司はバイクをコンビニの駐輪場に停めた。そのちよつと前から、排気音に聞きなれない雑音が少し混じっていたかもと照子は思い出す。

「エンジンの調子悪いの？」

「あー、ちよつとねー」

照子が尋ねると信司があいまいな返事をしながら、何度かエンジンをかけたり止めたりしている。

「てりこさん」

信司がささやくように呼ぶので、照子は「ん？」と顔を近づけた。「つけられてる」

「え？」

「多分途中の公園で来た連中の仲間だと思う。このまま、あやめちやんの家に行ってもいいけど、ドンパチはじめちゃいそうだし、途中で迎え撃とうと思うんだけど」

つけられている？ ドンパチ？ と照子は首をかしげたが、ゆっくりと信司の言葉をかみ締めるように頭の中で復唱して、ようやく意味を掴んだ。

あの怖い連中と闘うということか、と照子は難色を示した。

まいかた公園から逃げた先で追いかけてきた連中が、銃を取り出した時は、正直かなり腰が引けた。なので後で考えれば支離滅裂っぽいことを言っていたと思う。自分から向かっていったのは、まさにやられる前にやれ。そして逃げる。といった少々攻撃的な防衛本能が働いたからだ。

しかし今は違う。闘わなくてすむならそれに越したことはない。

「てりこさん。極めし者が絡んでるんです。てりこさんだって、極めし者の力が、ただの暴力に使われるものだと思われるのって、イヤじゃないですか？ この力は、人を苦しめるためのものじゃないはずだ。人の役に立てるものなんだ。そうは思いませんか？」

「てりこねえさま、お願いします。悪者をやっつけてください」

話を聞いていたあやめが手を組み合わせて照子を見上げてくる。

確かに、信司の言う通りだ。照子は普段から闘気を解放して極めし者としての力を隠さずにいる。それもこれも、周りの人達が極めし者を悪い人と思っていないから出来ることだ。だが極めし者に対する悪評が世間にあるのもまた事実。自分にできる範囲でそれを払拭するのも、力を持つ者の義務のような気もする。

だがやはり、あまりダークサイドの人間とは近づきたくないものだ。友好的な関係ならともかく、敵対したら後々まで追いかけてきそうだ。

「判ったよ。協力はする。でも信司くんがメインになって動いてくれたら嬉しいな」

「よかった、てりこさんの協力があるって約束だけでも心強いよ」
「うん。いざとなったら助けるよ。ところで、つけてきてるって人はどこ？」

肝心の闘う相手がどこにいるのか判らない照子であった。

「今は、駐車場の端っこに車を停めてるよ。多分こっちを観察しているんじゃないかな」

「じゃあ、どうするの？」

「ここで闘うのは、ちよつと人目が多すぎるかなあ。もうちよつと行った所に空き地があるはずだから、そこへ行こう」

信司の提案に、照子はうなずいた。

そして、照子達は空き地の近くにバイクとスクーターを停めた。
一見、また信司のスクーターの調子が悪くなつたかのように見せかけてその実、追いかけてくる男達を空き地に誘い出す作戦だ。

男達も人目がある場所よりは、周りに誰もいないほうが都合がいだらうという信司の思惑通り、今度は男達が車から降りて近づいてくる。

追いかけてきたのは四人の男だ。中年に足をつっこんでいるのから、信司とそう変わらない若い者まで揃っている。

すっかり日が落ちて頼れる明かりは外灯だけなので、男達の細かな表情などまでは判らない。だが数の優位に顔をにやつかせていることは見て取れた。

「うちの若いもんが、世話になつたようやなあ」

一番のリーダー格と思われる中年男が声をかけてくる。

「別に世話なんかしてないよ。それとも、あんたの仲間から逃げるのに、潰れちゃったバイクの弁償でもしてくれるの？」

信司が口の端を持ち上げて笑った。挑戦的で余裕たっぷりな笑みに、照子は彼に任せれば大丈夫だろう、と成り行きを見守る。

「ふざけんなこら。おまえがわざとバイクをぶつけたんやろ」

「えー？ だつて追っかけられたら誰だつてああするよ」

いや、それは信司くんだけだと思う、と照子はすかさず心の中でツツコミを入れた。

「このガキ。調子に乗りやがって。ただじゃすまへんで。わしを誰や思うつるんや。おまえのような」

「酒井さん、だったっけ。大阪の北の方にある『川口組』の組長の懐刀の。属性『山』の極めし者だよね。……違ってた？」

信司があっさりと素性を口にしたので、男、酒井は言葉を詰まらせた。

照子も、明かされた男の素性に驚く。組長の懐刀となると相当の地位なのだろう。そして極めし者だという。闘気を悪用していることに怒りを覚えつつ、怖いと思った。

「そこまで判ってるんやったら、身い引けや。車壊しよったことは大目に見てやる。そのガキをこっちによこせ」

気を取り直したかのように酒井がすこむ。そのガキとは、あやめのことだ。照子の後ろに隠れているあやめを見やると当然、照子にも視線を投げかけてくることになる。

頬に刻まれた傷跡がまず目に付く。短く刈り込んだ髪と、つりあがった目がより人相を悪くしている。

こんな男にあやめちゃんを渡せない、と照子は思った。その人相からして、何をされるのか判ったものではない。単純な暴力だけではなく、あんなことやこんなことまで平気でやるんだ、と想像して照子は身震いを覚えた。きつと信司がどうにかしてくれることだろうと期待を込めて信司を見る。

「渡せるわけないよ。抗争に有利になるように、子供を人質にとろうなんてまさに外道だよ」

信司が平然と首を振った。

「そ、そんなこと考えてたんだっ。この人でなしっ！」

照子の後ろのあやめが悲鳴にも近い叫び声をあげる。

照子はいやめの手をぎゅっと握った。

「大丈夫。信司くんがこんな男」

「あんたみたいな悪者は、てりこおねえさまにやつつけられちゃえばいいんだっ！」

「なんでそこでわたしっ!？」

照子の慰めの言葉をさえぎって、あやめはとんでもないことを言い出した。照子思わず異を唱えてなんの不思議があるつか。

しかし相手はそんな照子の都合など知るはずもない。

「ああ？ あんたがわしを倒すって？ ……なるほど極めし者か。

おもしれえ、勝負しようやないけ」

「てりこねえさまはチャンピオンなのよ。あんたなんか、けちよんけちよんなんだから！」

「チャンプか。ますますやりがいがあるな」

ああ、あやめちゃん、それ以上相手の神経を逆なでしないで、と照子は心の中で涙した。

信司に救いを求める視線を送ってみたが、彼は照子を見つめ返してにっこりと笑った。

「てりこさんが闘うなら、おれ、見てるよ」

「ちよっと、信司くん。話が違うつ」

思わず抗議したが、もうこの場全体の雰囲気が、照子と酒井が闘うという流れになってしまっている。

「てりこねえさまあ。お願いします。わたしを助けて」

あやめの、すがりつくようなこの目に弱い。可愛い妹のようなあやめの危機を今、救えるのが自分しかないなら、やるしかないのだ。

照子はうなずいた。

「わかったよ。やるよ」

「さすが、まいかた公園のチャンプさんだ。かつこいいですよ」

「おねえさまあー。あやめ、感激ですーっ」

いいように乗せられている感も、少しばかり覚えつつ、ま、いいか、と照子は考えることをすっぱりと放棄した。開き直った極めし者ほど強いものはない。そして開き直った女の底力を見せてやろう

じゃないか。

かくて照子と酒井は、あやめをかけて勝負することとなった。外灯が仄かに照らす中、照子と酒井は構えを取る。その距離、三メートル。

足元には短い草がたくさん生えているが、動きを阻害するほどのものではない。照子は目の前の敵に全神経を集中する。

照子の体を包むのは白熱色の闘気。酒井の体からは緑の闘気が噴出している。体の近くは白みがかっているが、体を離れると深い緑となる。

信司の言う通り、酒井の属性は「山」だと照子は見取った。「山」属性は力の属性。その一撃をまともに食らうと相当のダメージを負うことになる。

拳を作って胸元に掲げるスタイルの照子に対し、酒井は掴みかからんとする手を腰と胸の高さに構えている。

相手の構えを見て、彼は関節技や絞め技を得意とするサブミッシヨントypeかと照子は見積もる。このTypeは、自分に有利な状態で相手の部位を掴むことに長けている。関節技のみでなく、そこから投げ技に転じる場合も考えられる。

相手の間合いに不用意に入らないようにせねばならない。

照子が先制攻撃を仕掛ける。光り輝く闘気を足先から蹴り出した。酒井はサイドステップで回避。地に足をつけると同時に照子に向かって突進する。

後ろへ身を引きつつ蹴りを放つ照子。右足に、相手を捕らえる衝撃が加わった。

相手がひるんだ隙にまた距離をとる。照子に優位な展開だ。

これがチャンスとばかりに照子はさらに攻め立てる。

跳んだ、撃った、さらに闘気を叩き付けた。

今まで照子が闘い勝利を収めてきた相手だと、もう倒れてもいい頃だ。

その油断が隙を生んだ。

気がついたら相手の拳がもろに胸元にヒットして、地面に打ち倒されていた。

「ちょ……、何よその体力とパワー。反則よっ」

照子は思わず毒づきながら立ち上がる。

「ふん。極めし者のタイマン勝負に反則なぞあるかつ」

酒井がにやつきながら近寄ってきた。

てつきりサブミッションタイプだと思っていたが打撃技も得意としている相手に、照子は戦法を練り直す。

と言っても鬪いの最中に考えられることは限られている。

相手は一撃必殺系。こちらの攻撃も効いてはいるだろうが、威力は小さい。

ならば手数で押すしかない。

近づき攻撃して身を引く。近づくと見せかけて鬪気の波を飛ばす。その繰り返しでどうにか相手に有効なダメージを与えることはできる。だが酒井の一撃はやはり脅威だ。酒井にいわゆる「飛び道具」系と呼ばれる、離れていても鬪気を飛ばして攻撃する技がなさそうなのが幸いだった。

時間が経つにつれ、照子は焦りを覚え始める。自分の方が優位なのに、手数では断然勝っているのに、相手は倒れない。この辺りで大技を仕掛けて終わらせたいと思う。

照子は鬪気を右手に集めた。白く光り輝く拳を大きく後ろに振りかぶる。

酒井が表情を変える。さすがに超技をまともにくらってはまずいと思ったのだろう。だが彼の動きよりも照子の方が早かった。

拳を突き出した照子の体が白い尾を引きながら酒井に迫った。

ひととき大きな打撃音。酒井が後ろに吹っ飛ばされる。

酒井は起き上がってこない。誰もが勝負の終わりを信じた。

「わたしの勝ちよ。これ以上あやめちゃんを追いかけるのやめてもらうからね」

照子が勝利宣言をした、その時。

地面に仰向けにひっくりかえったままだった酒井がにやりと笑う。照子は驚き身を引いたが、その時には闘気の放出の直撃を受けていた。巨大な闘気の壁が照子の体を持ち上げて放り出す。苦痛を訴える呻き声を口の端から漏らして照子は地面に投げ出された。

「ふん。てこずらせてくれよってからに」

酒井が起き上がって、いやらしい笑いを浮かべながら照子に近づいてくる。対し照子は腹を押さえて上半身を起こすが、闘いの続行はまだ無理だ。

このまま負けるかも、と思うと、照子は瞬時に、三年前の「あの男」との闘いを思い出した。

圧倒的な強さで自分を叩きのめした「あの男」を思い起こすと、思わず体が縮まった。

一気に高まった緊張をほぐしたのは、あやめの叫び声だった

「わたしのてりこねえさまに何するのよ！ このロートル！ いやらしい目で、ねえさまを見ないで！ 変態！ すけべ！」

「ろ、ロートルだとっ？ わしはまだ四十二だっ！」

「十分年寄りじゃない！」

酒井とあやめが、勝負をそっちのけで怒鳴りあっている。

照子は、ぽかんとその様子を見つめていた。信司を見ると彼も口をあんぐりと開けている。が、照子と目があうと、にっと笑って酒井に目配せした。

（そうだ、チャンスだ！）

照子は思い切り闘気を解放した。酒井がそれに気付いた時にはもう、照子は超技のモーションに入っていた。

前転して酒井の足元にもぐりこむと、逆立ちで体を起こしつつ酒井の腹を蹴り上げる。

伸び上がり、手を地面から離すと、照子と酒井は大きく放物線を描いて飛んでいく。

照子は綺麗に着地したが酒井は頭からべしやりと草の中に叩きつけられた。極めし者でなければ首の骨の一本や二本、折れているだ

ろっ。

「今度こそ勝負ありねっ」

地面に伸びて目を回している酒井に照子が勝利宣言。信司とあやめが拍手喝采を送った。

「不意打ちくさいことしおって……」

酒井が不満を漏らす、照子はふんと鼻で笑ってやった。

「極めし者の勝負に卑怯なものもないわよっ」

思い切り横槍が入ったことは、この際考えてはいけない。

「ちっ。今日のところは引き下がってやる。次はこうはいかんで」

酒井はなんとか立ち上がって、ひと睨みくってから部下を連れて立ち去った。

「……はああ。行っただわねー」

照子はぺたんと地面に腰を降ろした。

「お疲れ様、てりこさん。負けそうになったらおれも助けに入ろうかと思つてたけど、先越されちゃったね」

信司が笑ってあやめを見る。

「てりこねえさま、わたしのためにありがとう」

あやめは照子にぎゅっとしがみついていた。

「どういたしましてー。とにかく無事でよかったー」

緊張が抜けたことで、照子はあやめにしがみつき返した。

しかしその和やかな雰囲気も一瞬にして打ち破られる。

一台の高級車が空き地の前に止まった。その中から、さっきの男達に負けず劣らずの人相の悪い連中がぞろぞろと出てきた。

「またなの？」

照子は思わず悲鳴にも似た声をあげた。

ROUND 1 - 7

男達はあやめの姿を見ると腰を折って頭をたれた。

「お嬢、家出などやめてどうぞ家に戻ってきてください」

「お嬢？ 家出、って……。ひょっとして、あやめちゃん、暴力団関係の」

照子があやめを見て問いかけたが、彼女をさえぎって男達の一人が声を荒げた。

「暴力団じゃないわい！ あんな外道と一緒にするな！」

「は、はいっ。すみませんっ」

思わぬ場所からのドスのきいたツツコミに、照子は思わず姿勢を正して頭を下げた。

「お嬢を助けてくれた人に、その言いようはなんや！」

更に怒鳴り声が響く。その声の主は、照子に怒鳴った男よりも更に若い感じがするのだが、立場は上なのだろう。叱られた男が「へい。すいません」と恐縮している。

「うちのもんが、失礼しました。俺は田村隆介たむらいつよしちゅうもんです。もうお察しかとは思いますが、そのあやめお嬢さんは、うちの組の組長の娘さんです」

田村が言うには、あやめは、大阪のやくざ、「桐生会」の組長、桐生総一郎きりゆうしゅういちろうの一人娘だという。

桐生会は、あやめを誘拐しようとしていた「川口組」のような典型的な暴力団とは違い、地元根付いた、細々とした活動をしているやくざだという。

「あんな、カネのためならクスリや暴力に頼る連中とは違うんです。そのあたりはご理解いただきたい」

田村はそう言って照子に頭を下げた。

この田村という人は、それほど怖くないと照子は思った。話が通じそうな相手だ。

「……暴力団もやくざも、変わんないわよ」

あやめがふてくされたような顔をしてつぶやいた。

「お嬢……。そんなふうにいわんとなってください」

田村が眉をハの字に曲げてあやめを見た。

「とにかく、組長が、お父上が心配なさってます。また襲われても困りますし、家に帰りましょう」

田村の懇願するような提案に、あやめはしぶしぶうなずいた。「川口組」の連中がまた来たら、確かに大変だと思ったのだろう。

あやめは田村につれられて彼らの車に乗る。

娘を助けてくれた礼を言いたいと組長が言っているらしいので、照子と信司も桐生家に行くこととなった。

こんな機会でもない限り、やくざの邸宅に行くこともないだろう。どんな家だろうかと照子の好奇心がちょっぴり刺激される。田村が話の判りそうな男だということと照子は気が大きくなっていた。

バイクで移動すること三十分弱。一同は桐生家に到着した。

古い日本邸宅で、大きめの木の表札には桐生の文字が墨で書かれている。近所の近代建築の家々からすれば明らかに浮いているが、ここまでどつしりと構えていると、周りがこの家に不調和なのだと思うほどだ。

「おかえりなさいませ、お嬢」

玄関の近くで、若い男た数名、並んで出迎えている。あやめは「ただいま」と小さな声でつぶやいて家に入っていく。

田村が、どうぞ中へと勧めるので照子と信司も門をくぐった。どうやらお出迎えの男達も、照子達があやめを助けたのだと聞いているらしく、深々と頭を下げた。

どこかで見たことがあると思ったら、まいかた公園であやめに近寄っていた男達だ。

なるほど、だから彼らは柄が悪そうに見えたが手荒なことまではしなかったのかと照子は納得した。

事情を知らなかったとは言え、申し訳ないことをしてしまったな

あと照子は心の中で彼らに詫びた。

通された和室は二十畳くらいだろうか、広々としている。家具は比較的新しいと思われるが、つやがなくなり、細かな傷もたくさんある大黒柱が古い建築であることを物語っている。

座布団に正座して待つこと一分ほど。隣に座るあやめも、今はおとなしい。

やがて風格のある男がゆっくりと部屋に入ってきた。

その威厳からして、この人が組長なのだろうが、照子はもっと老けた男を想像していたのに意外にも若かった。まだ四十代と思しき中肉中背の男性は、笑顔の中にも人を従えさえる何かを秘めている。「ようお越しくださった。私があやめの父、桐生総一郎です。このたびは娘が危ないところを助けていただいたそうで、ありがとうございます」

漆塗りの座敷机の向かい側に座った総一郎は、深々と頭を下げた。少ししわがれたバリトンの声には渋みがある。

彼が「桐生会」の組長としてではなく、あやめの父として礼を述べたことに、照子はなんだか安心した。あやめが家出を考えるくらいだから、もっと娘のことは放ったらかしの怖い親父かと勝手に想像していたが、どうやらそうではないようだ。

「他戸照子です。たいしたことはありませんが、お嬢さんがご無事でなによりでした」

「富川信司です。本当に、てりこさんがやつつけてくれたからよかったよ」

信司の言葉に、総一郎が照子の手を取って、ぐっと握った。

「あんたが追い払ってくれたのか。若い女の身で強いんだな。なんていったかな、そうそう、きわものだったか」

「極めし者です」

いきなりキワモノ扱いとは酷いものだ。照子は思わずこけそうになった。すかさずツツコミを入れるに留まったのは自分でも褒めたいぐらいだと思った。まあしかし、世間一般での極めし者の認知度

はこんなものだ。

「おおそうか、極めし者か。うちの組には、そういった力を持ったのがおらんからなあ。あんたらがおらんかったら、あやめはどうなつとったことか」

総一郎は心底嬉しそうにまた頭を下げた。

「いいえ、いいですよ。こんなかわいい子を事件に巻き込もうだなんて、許せないですしね」

本当は信司がやつつけてくれるはずだったのだが成り行きで照子が闘うことになったとは言わないほうがよさそうだ。

またひとしきり感謝の言葉を述べた後で、総一郎はそもその事件のあらましを教えてくれた。

大体は信司が酒井に話していた通りだった。

この「桐生会」は規模の小さなやくざ。地元の商店街と強く結びついて、取り仕切っている立場だ。対し、「川口組」は麻薬の売買にも手を出している典型的な暴力団だ。大阪の北部をほぼ牛耳っている。「川口組」は「桐生会」を吸収してしまおうと目論んでいる。ようだが、頑としてはねつける「桐生会」に、ついに暴力的手段を用いてきたといったところだそうだ。

「でもそれじゃ、これからこんな事件がまた起こったりしませんか？」

信司が心配そうに聞く。あやめはぎょっとして父親と信司を見比べた。

「その心配はもうない。今回のことはこちらが完全な被害者だからね。捜査機関の人達がきちんと対処してくれることになったそうだし」

総一郎の言葉に、その場にいる全員が、ほっとため息をついた。まるでそのため息に呼ばれたかのようなタイミングで、部屋に一人の若い男が入ってくる。

「お話し中すみません。組長、鈴木さんがお見えになってます」

総一郎にそつとささやくような声だったが、照子にも聞こえてきた。

「ああ、判った」総一郎は男を下がらせて、照子達に向き直った。
「来客なので、私はこれで失礼させていただきますが、どうぞごゆっくりなさってください」

照子達がうなずくと、総一郎は、では、と言って腰を上げ、また丁寧に部屋を出るときに頭を下げていった。

部屋に残ったのは、あやめと照子、信司、そして若頭の田村の四人。

「あー、あの怖いのがもう来なくなってよかったー」

あやめがそれまでの沈黙を破って、ついでに足を崩して大きくため息をついた。

「よかったね、あやめちゃん」

「はい。これも、てりこねえさまのおかげです。ありがとうございます」

「信司くんのおかげでもあるんだけどね」

「あ、そうでした。信司さんもありがとうございます」

「おれはおまけみたいな扱いだなー」

ひとしきり笑った後で、照子はふと疑問に思った。なぜあやめは家出などしたのだろうか、と。

「ところで、あやめちゃん、どうして家出したの？ お父さんと喧嘩？」

「喧嘩なんてしません。お父さんとは、できるだけ口ききたくないの」

「お父さんが嫌い？」

「だって、やくざですよ？ 学校の友達も、家のこと知ったら急に怖がっちゃってハミみたいに避けるし」

あやめは悲しそうに、つぶやき声で言った。

なるほど、だから信司の話を聞いた時に、早く家を出たいと言ったのか。照子はうんうんとうなずいた。

「判るよ。自分が悪いわけじゃないのに怖がられるのって、理不尽に思うよね。でもさ、あやめちゃん。家出してどうするの？」

家出の理由には同情するが、ここはやはり教育関係に勤めている者として完全に同意するわけにはいかない。こうして知り合ったのも何かの縁とばかりに、照子はあやめに真正面から向き合って真剣に言った。

「早く家を出たいなら、きちんと学校に行って、ちゃんとした職についた方が結果的に早く自立できると思うよ」

照子の説得に、あやめは「それは、そうですね……」とうつむいた。

「それにさ、学校で友達にいやな思いをさせるのがお父さんのせいなら、お父さんに仕返ししちゃえばいいのよ」

「仕返し？」

あやめが顔を上げた。

「うん。大人になるまで、たくさん面倒見させればいいの。ものは考えようじゃない。逃げちゃったら、いやな思いだけ押し付けられて終わっちゃうんだよ」

あやめはしばらく考えて、ぱあっと顔を輝かせた。

「そっか。いっぱい贅沢して、わがまま言って、困らせてやればいいんだ」

「そうそう。いい学校行つて。資格とか取つてさ。そのための金、ぜーんぶお父さんに出させればいいの」

あの父親なら、あやめがそれぐらいのことを言つても、むしろ喜ぶかもしれないと照子は思ったが、それは言わないお約束だ。

「判りました、てりこねえさま！ わたし頑張ります。早く家を出られるようにっ」

「大学出てからすぐにでるなら、そうかからないよね。あやめちゃん、高校生でしょ？」

「ううん。わたし、中学二年生です」

「……えっ？ あやめちゃん中学生だったの？」

なんて大人びた中学生だと照子は愕然とした。最近の子はなんて発育がいいんだ。そしてませている。

「それだつたら尚更、家出はダメよ？」

「はい。てりこおねえさまがそうおっしゃるなら」

素直なあやめに、照子はまた、うんうんとうなずいた。

「てりこさん、説得力あるなあ」

信司が感心したように言う。

「俺も感心いたしました。お嬢に言うことを聞かせられる人など、
そうそういるものではございませんぜ。これからはあなたのことを、
姐さんと呼ばせていただきます」

田村が話に入ってきた。

「あ、あねさん、つて、まあ似たような呼ばれ方されてるからいいけど」

「田村、なにげーにわたしに対して失礼なこと言つてない？」

「そ、そんなつ。お嬢つ。この田村、お嬢に失礼などいたしません
つ」

田村のあまりのあわてぶりに、照子と信司は思わず笑っていた。

「……それじゃ、そろそろ帰ろうか」

「そうですね」

照子と信司が腰を上げると、あやめが例のうるうる瞳で尋ねてきた。

「てりこねえさま、また試合見に行つていいですか？」

「もちろん。……あやめちゃん、わたしはあやめちゃんのこと、全然怖いと思つてないよ。お父さんのことだつて、いい人だと思う。だからあやめちゃんのママは、お父さんと結婚したんだと思うよ」

照子の言葉に、あやめは、ぱあつと顔を輝かせた。

「ありがとう、てりこおねえさま！」

抱きついてくるあやめは、とても年相応のかわいい女の子だと、
照子思った。

桐生家を出て、照子は信司に改めて向き直った。

なぞの多い格闘家。それが今、照子が信司に抱いている印象だ。

そう言えば勝負はお預け状態だ。今は仕事でこちらにいるという信司だが、次にいつファイトできるのかは判らない。

「今日は、いろいろあったねー」

「ああ。勝負もお預けになっちゃったし」

ファイトのことを覚えていてくれたので照子は嬉しかった。

「また次に機会があったら是非、最後まできちんと闘ってみたいんだけど。そうだ、信司くん携帯とか持つてる？」

信司はうなずいて携帯電話を取り出した。メールは使っていないことなので、電話番号だけ交換する。

「じゃあ、またこっちに仕事で来ることがあったら、その時にぜひ」
「判った。それじゃ」

信司が、おんぼろママさんスクーターに湯を入れ、ポンポンポンと怪しげなエンジン音を響かせて去っていった。

また今日も、「あの男」の手がかりは何もなしだったと照子はふと思い、がっかりする。彼と再びまみえるために格闘を続けているようなもののに、一向に近づけはしない。

でもくじけない。いつかきつと、見つけ出して再戦を挑むのだ。

もう少しあやめちゃんと仲良くなったら、お父さんにも協力してもらって探せるかもしれないと、ちよっぴり期待しつつ、照子も愛車のエンジンをかけて、桐生家を後にした。

彼女が去るのを、複雑な表情で見送る影がいることにも、気付かず……。

(R O U N D 1 了)

ROUND 2 あの手へ繋がる道 1

忙しい。とにかく忙しい。

それがこの数日の、照子の生活であった。

予想していたとはいえ、やはり大学の年度初めは仕事が山積みだ。卒業していった学生達との別れの感傷が残る中、新入生を迎える準備が始まっていた。そして四月に入って実際に新入生を迎えてから、授業が開講して落ち着くまでの二週間近くが事務員達がもつとも泣かされる時期。

通常の業務に加えて、学生課のカウンターに押し寄せる学生達の対応に追われる。勝手の判らない新入生はまだしも、手続き書類に不備のある在学生にも煩わされる。もう大人の仲間入りをしているはずの者達が、再三の呼び出しにもなしのつぶてとは何事か、といったものことながら憤慨するのだ。

今日も、きつと百人は超える学生の相手をして、おまけに残業までした照子はへとへとになって大学構内を出た。

「さようなら」

照子を職員と知っている学生、数人が声をかけてくる。この時間までいるのは、二十時まで開いている図書館を利用していたが、クラブ活動に精を出していた者達だろう。照子は疲れた表情をあわて引っ返めて「さようなら、気をつけて帰ってね」と返した。

彼女が大学に勤めるきつかけとなったのは、卒業年次である四回生の冬に教授に声をかけられたことだった。中学教諭を目指していた照子は、就職浪人を覚悟の上で教員の採用試験に臨もうとしていたのだ。教授は照子に、職員の欠員がでて次の春から勤めてくれる学生を探しているのだと伝え、もしも事務職に就くことに抵抗がないなら、採用試験を受けてみるように勧めてくれた。

中学教諭にも未練はあったが、周りの勧めもあって照子は大学の採用試験を受けた。他三名の受験者を退け、無事に採用となったの

だった。

照子は学生と接することが好きだ。手を焼かされることも多いが、彼らの笑顔が疲れを癒してくれるのも事実だ。事務職だが、教育関係に変わりないと、大学の採用試験を受けてよかったと思っている。彼女の優しさと、時には叱咤する真剣さに、学生もまた応えてくれることが多いようだ。同僚が手を焼く問題児　もう二十歳前後なので、問題児というのも問題だが　も、照子には従順だということもある。

同僚にそれを指摘され、照子は、それはわたしが極めし者だからじゃないのかな、などと思ったりもしたのだが。

照子が、職場の近くのまいかた公園でチャンピオンであることは、学生の間でも結構有名のようだ。大会の観客席に、時々大学で顔を合わせる学生が混じっていることもある。

まあ理由はどうあれ、そのおかげで事務が円滑に処理できるなら言うことはない。

照子は家に帰って、自室の電話をチェックした。インターネット用に設置した電話だが、ごく親しい人達にはこの電話番号も伝えているので、かかってくることもある。

今日も留守番電話にはメッセージはない。照子はちよっぴりがっかりした。彼氏の結が連絡を超越してこないかと、ほんの少しだけ期待していたのだ。もっとも、結ならばこちらの電話よりも携帯電話にかけてくる可能性が高いのだが。

夕食を食べてから、彼にメールでも出してみようかな、と思ったが、部屋に戻って携帯電話と部屋の電話をチェックすると、部屋の電話に一件のメッセージが入っていた。

きつと結だと喜んで再生すると、期待通りの声が聞こえてきた。『こつちかなと思っただけど、ひよっとして食事中かな？　特に用事はないけど、今日は早く仕事が終わったからかけてみた。……それじゃ』

なんと簡潔なメッセージだが、それでも照子は嬉しかった。た

だ、結の声が疲れているように聞こえたのは録音のせいだけではないだろう。そう思うと心配でもあるのだが。現に、メッセージを受けた時間は二十一時を回っている。これで早く仕事が終わったというなら、最近の結は連日それ以上に働いていることになるのだ。照子も年度初めで残業が続いているが、結も大変なようだ。

声が聞きたいな、と照子は思い、同時に受話器を上げていた。

結の携帯にかけてみた。相手が応答するまで、なぜだかドキドキする。付き合い始めてもうすぐ二年になるというのに、まだこんな心地よい緊張を覚えるとは、わたしもまだまだ乙女な面があるよね、と照子は愉快に思った。

そして今年で二十八になる自称乙女のドキドキが最高潮に達した時、相手が電話を取った。

『もしもし』

「もしもし、結？」

『ああ、照子。折り返してくれたのか。わざわざごめん』

結の第一声は、やはり疲れていたが、照子の名を呼ぶ声は少し明るいトーンになった。もしも自分がかけたからだとすると嬉しい、と照子も笑みを浮かべる。

「前に聞いていた通り、忙しいみたいだね。大丈夫？」

『ん。大丈夫。そっちこそどうなんだ？ 新学期はいつも大変だった言っただろ』

「結に比べりやどうってことないよ。ストレスも、週末に格闘大会に出て発散できるし」

『ストレスの発散ができるのはいいよな。おまえが元気そうで俺も嬉しいよ』

こんなやりとりがすごくあったかい。照子は幸せに浸った。

しかしその後が続いた結の一言で、別の意味で照子の心臓が跳ね上がる。

『そう言えば、先週の土曜日に大会に出た時に、乱入者がいた、ってサイトの日記に書いてたけど。何があったんだ？』

ぎくつと照子は硬直。ああそくだサイトにちよつとだけ書いたんだった、とため息をついた。「桐生会」の男達が、あやめを連れ帰ろうとしていたことは、公園で照子と信司の勝負を見ていた人が目撃しているのでも今更隠しても無駄だろうと思つたのだ。

しかし心配性なところのある結には、日曜日に夕食デートをした時にも、詳しいことは話していない。

暴力団と関わつたとあつては、きつと結は眉根を寄せて「そんな危ないことにまで首をつっこむなよ」と言いそうだ。いや電話だから彼の眉根が寄つたかどうかなんて判らないのだけれど。

「あー、大体サイトの日記に書いたとおりだよ。極めし者の男の子と勝負してる時に、ストーカーだつて女の子が悲鳴をあげて、追つ払つたの」

「そうか。ストーカーだなんて物騒だな。おまえも気をつけろよ」
ほら来た、と照子は笑つた。極めし者にストーカーするなんてどんな酔狂なヤツだ、と言うと結も、「まあ、それもそうだな」と笑つた。

「結は心配性なのよ。大丈夫だつて」
「そりや自分の彼女の近くで事件めいたことがあつたんだつたら心配もするよ」

そこで結は一呼吸おいて、念を押してくる。

『本当に、それだけ、なんだよな?』

うわうわつ、つつこまないで、と照子は大焦り。

「もう、だーいじょーぶだつてば」

それだけだつた、と言えば嘘になるので、照子は返事を濁した。

『ん。判つた』

結の声は、なぜかため息交じりだつた。きつとおてんば　とはもう言えない歳だが　な彼女にあきれたのだろう。

そう言えば、あやめちゃんが結に会いたがつていたっけな、と照子は思い出した。

照子としては、会つてもらふのは別にかまわないが、あの時のこ

とは話題には出さなくてもいい。事前にあやめに言っておく必要がありそうだなと照子は考えていた。

携帯を机において、結は思わずため息をついた。照子に聞きたいことを聞けなかった自嘲の吐息だ。

結は照子が、まいかた公園で桐生あやめという少女を助けたことも、その後に「川口組」という暴力団と関わったことも知っている。今日電話をしたのは、その辺りの事情を、できるなら聞き出したかったから。

彼女を心配してというのももちろんそうだが、仕事として必要な情報だった。

彼女から聞き出せなかった以上、また変装をし、鈴木という偽名を名乗って、「桐生会」に行かねばならない。あやめから直接事情を聞くために。

翌日、結は会社に出勤して、上司の西村に経過を報告する。

「では、やはり桐生あやめから詳しいことを聞いて来てくれ」
予想通りの西村の命令に結はうなずいた。

「……やりにくいかな？ 自分の恋人が絡んでいる事件の担当は？」

西村が、少々からかうかのような口調で訪ねてきた。

「それは……」

結は思わず素直にうなずきそうになった。

はっ、ここではいと答えてどうするんだ、と結は苦笑をもらしてかぶりを振る。

「そんなことはありません。与えられた任務を遂行するのみです」
「それならいいのだがね」

にやっと笑う西村は、やはり結をからかっているようだ。

直属の上司がこのような茶目っ気のある人だとは思わなかった、と結は笑みを返して一礼してから、いつも極秘の仕事を言い付かる

小会議室を後にした。

彼が勤める「IM財団」は、日本最大手のSE派遣会社だ。しかしその一部では諜報活動が行われている。主に企業犯罪の摘発に暗躍するのだが、暴力団などの組織犯罪を極秘裏に捜査するよう警察から要請されることがある。

結は、諜報部に所属するエージェントだ。

夕方になって、結は準備をして桐生家に向かう。

できれば照子に直結する人物にも直接会いたくなかったのだが、と結はひそかにため息をついた。だが仕事に選り好みは許されない。もしかするとこれから照子に接する可能性のあるあやめには、正体を知られるわけにはいかない。

表情を引き締めて、青井結という個性を捨て、彼は桐生家の門をくぐった。

通された和室はとても広く、建てられてから経った時間を伝える古い柱や壁と比較的新しい家具の微妙なアンバランスさが、内心緊張する結の心を更に浮き立たせる。

落ち着け。いつものように冷静に、と結は何度も心の中でつぶやいた。

やがて、重い足音が近づいてきて、「桐生会」組長、総一郎が姿を見せる。後ろには若い衆が二人控えていた。

総一郎は机をはさんで結の真正面にどつかと腰を下ろし、軽く頭を下げる。

「鈴木さん、いつもご足労かけてすまんね。それで今日は、あやめに話を聞きたいと?」

総一郎はまだ四十にも達していないが貫禄がある。娘のあやめが「川口組」に狙われていると伝えた時にはさすがに焦燥していたが、事件が極秘裏に解決した今は余裕が伺える。少ししゃがれたバリトンの声が彼の印象を実年齢よりさらに引きあげている。

「はい。お嬢様に当日の詳しい状況をお聞かせいただければと、お伺いいたしました」

かつらと軽いメイク、つけばくろで変装をし、「鈴木」として結は地声よりもややトーンを上げて話す。

「ああ、『川口組』をきっちり抑えていただけんなら協力は惜しみませんよ」

総一郎は若い衆に、あやめを連れて来るように言いつけた。

ややあつて、高校生ほどに見える少女が連れられて来る。

確かこの子はまだ中学二年生になったばかりだな、と結はあやめを見ながら立ち上がった。

不安げに怯えているようにも見えるが、なかなかの気の強そうなところもありそうだ、というのが、あやめを初めて間近で見た結が抱く第一印象だった。

総一郎も立ち上がって、あやめと結、それぞれを紹介した。

「これが私の娘のあやめだ。あやめ、こちらは鈴木さんと言って、今回のおまえの誘拐事件を片付けてくださった人だよ」

頭一つ分ほど下に視線を向け、あやめと目を合わせて結は目礼した。

怯えの裏返しなのか、まるで睨みつけるかのように見上げてくるあやめの視線を受け止めて、結は、なんとなくこれからこの子には苦労させられるかもしれないと、不吉な予感を抱いたのだった。

ROUND 2 - 2

この子は手ごわそうだという結の予感、ものの見事に的中しているようだ。

「わたしを助けてくれたのは、てりこおねえさまよ。鈴木さんだか田中さんだか知らないけれど、こんな背だけ高い弱っちそうな人に何ができるのよ」

あやめはふてくされているのが丸わりの声だった。

結は思わず苦笑を漏らした。あやめはびくつと肩を震わせて顔をこわばらせたが、それも一瞬のことですぐまた結を睨みあげてくる。

見知らぬ者に対する恐怖を攻撃性に置き換えてごまかすタイプか。威勢のいい子供だと、結はますます笑みに苦いものを混ぜそうになったが、ここは平和的に事を運ぶためにもこらえておく。

結は子供の無礼を寛大に許す大人の微笑みを浮かべてあやめを見下ろす。

「こらあやめ。そんなふうに言うもんやあないで。鈴木さんが『川口組』の連中を抑えてくれよったから、あの一度だけですんだんや」総一郎があやめを制する。結に対する丁寧な口調よりも砕けている。

「それにな、鈴木さんも強いそうや。ああ、なんていったか、きわもの、だったか」

「極めし者です」

結は思わず即座につっこみを入れた。

「おおそうだ。そういえばこの前も強いお嬢さんに教えてもらったんだっとな」

一度訂正されたなら覚えてくれと、結は肩を軽くすくめた。

「ふうん？ 『川口組』にカチコミ行ったんだ」

殴りこむという意味の「カチコミ」が、すらっと出てくるあたり、さすがはやくざの娘といったところか。

「荒事を仕掛けに行つたわけではありませんが……。では、改めて伺います、あやめさん。先週の土曜日に起こつた出来事を、できるだけ詳しく教えていただけませんか？」

あやめは、判つた、と応えて腕組みをし、考え込むように首をかしげた。

「わたし、クラスの子達に暴力団の組長の子供だつていうんでハブられちゃつたのね。それに超むかつて、家出したんだ。でもどこに行こうかなんて考えてなかったから、ちょっと前に友達に、てりこねえさまの話を聞いてたのを思い出して行つてみることにしたのでりこねえさま、すっごい人気者だったから声かけるのがメチャ恥ずかしかつたけれど、思い切つて試合前に話しかけてみたの」

それからしばらく、あやめはいかに照子が優しく、強く、素晴らしい女性なのかを語つた。照子のことを話すあやめはとても嬉しそうだ。

照子は極めし者としての力を隠すことなく生活していても、異端の白い目で見られることなく周りの人達をひきつけているのだな、と内心嬉しく思いつつ、結は知らぬ振りで尋ねる。

「あやめさんがおっしゃる『てりこ』さんとは、通称まいかた公園で開かれる格闘大会に出ていらつしやる方ですね？ 本名はご存知ですか？」

「本名……。あれ？ なんだっけ……」

あやめは首をひねる。

相手の本当の名前も知らずに、しかしこれだけ傾倒できるとは、まるでアイドルの追っかけのようだ。やはり幼さゆえの情熱なのかもしれないと結は感心した。

「ああ、結構です。格闘大会の主催者に問い合わせてみます。話を続けていただけますか」

あやめはうなずいて、その日一日の出来事を語る。ところどころ要領を得ない説明があったり、何より照子への賞賛が始まると、ストップをかけなければならぬほどに興奮するので、結はそのなか

ら必要な情報を抽出するのに少々難儀した。一体何度、彼女の口から「てりこねえさま」という単語を聞いたことだろう。

「大体のところは判りました。ありがとうございます」

話を聞き終え、結はあやめに頭を下げた。

あやめはわざとらしく大きくため息をついて結を見る。

「やつと終わり？ 疲れちゃったよ。田中さんだったっけ。ちゃっちゃとこの事件終わらせてよね。もうあんな連中をこっちに寄せさないですよ？」

「鈴木です」

思わず名前にツツコミを入れたが、まるで自分が対立暴力団を超越したかのような言われようにコメントすべきだったか、と結は心の中で嘆息した。

「別に鈴木さんでも上田さんでもいいじゃない。どうせ偽名なんですよ？ そういう仕事してるんだから」

鈴木が偽名である事を言い当てられて結はヒヤツとした。これだから裏家業に関わる者は侮れない。たとえ子供であっても。

「あやめ。鈴木さんに失礼な態度をとるんじゃない。……申し訳ない、まだ子供ゆえに生意気を言いますが許してやってください」

今まで黙ってあやめと結のやり取りを聞いていた総一郎だったが、さすがに娘が命の恩人に無礼を働くことは見逃せなかったようだ。このあたりが仁義に篤い職業柄といったところか。

「いえ。お嬢様には貴重な証言をいただきましたありがとうございます。今後『川口組』がこの件に関しましてお嬢様はもちろんのこと、『桐生会』に暴力的手段を行使してくることはないでしょう」

結は軽く頭を下げてから、立ち上がって退出の旨を伝えると、今度は深く礼をした。

総一郎達に見送られながら、結は「桐生会」の本宅を後にした。

「……ああ、……疲れた」

車の中で思わずもれた本音を誰かが聞き取ったとして、咎める者はいないだろう、きっと。

あやめの不機嫌そうで生意気な顔を思い出してまたため息ひとつ。仕事に疲れたこんな時は、無性に照子に会いたいと思う結であった。

四月の第一土曜日。照子にとっては待ちに待った週末だった。

ここ一週間の忙しさときたら尋常ではなく、息抜きがしたいとずっと恋焦がれていたのだ。

今日も、いつものようにシャツとジーンズ、赤のジャケットとバングナといういでたちで公園に姿を見せた照子に、ギャラリーは笑顔を向けた。

その中に、先週ここで会った少女の姿を見つけた。

照子の姿を見つけて走りよってくるあやめに、照子はなんだかほっとした。

あの事件から一週間が経つわけだが、果たしてあやめの身边はどうなったのだろうかと気になっていたからだ。

先週は、体のラインを強調するような、中学生とは思えない大人びた服装をしていたあやめだったが、今日はシャツとジーンズというラフスタイルだ。うっすらと化粧をしているのは相変わらずだが、前よりも歳相応に思える。

「てりこねえさまー！ 会いたかったですー！」

あやめは照子に飛びついてきた。照子も笑ってあやめを軽く抱き返してからそっと離れた。

「あやめちゃん、元気そうだね。その後どう？」

「はい。元気ですっ。てりこねえさまにお会いできることだけを楽しみにして来ました」

照子なあやめを連れて、ひと気の少ない場所まで移動した。周りの人達は照子達のことを不思議そうに見たが、元々格闘大会を見に来ているということもあり、試合の方に視線を戻していく。

「それで、あのことは、どうなったの？」

一応誰も聞いていなさそうかを確認したが、それでも照子は直接事件のことは口にしなかった。

「『川口組』のことですよ。もう大丈夫っぽい」

なのにあやめはあっけらかんと言つてのけたので、思わず照子は苦笑い。

「なんか、どこかの捜査機関の人が来たよ。鈴木とかいう無愛想なおじさんが。その人がうまくやってくれたんだって」

「そう。よかったねー」

照子は喜びながらも、あれ、どこかで聞いたことあるような？と首をひねった。しかし鈴木という名前はたくさんあるので、そこそいゝろんなところで聞いているだろうと、あまり深く気に留めなかった。

「よかったけど……。なんか、あの人きらい」

「どうして？」

「なんとなく」

実に子供らしい感覚だと照子は微笑む。

「でも解決したならもう会わないんでしょ？」

「うん」

それまで不満そうにふくれっ面をしていたあやめは、ぱつと笑顔になった。

よっぽどいやな人なんだ、と照子も思わず笑った。

「てりこねえさまは？ あれから信司さんとは会ってないんですか？」

照子のかぶりを振った。信司とはあれ以来連絡は取っていない。またいづれ、と言いなながらも、仕事が忙しくてその暇はなかった。よく知っている間柄なら、夜遅くても気にせず電話をするのだが。そのようなことを説明すると、あやめはふうんと相槌をうった。夜遅くと言えば、と照子は思い出したように話す。

「昨夜いきなり彼が電話かけてきて、ちよつとでいいから会おうっ

て言うのよ。すごく珍しいことだからびっくりよ」

「彼氏さんも忙しいんでしょ？　てりこねえさまに癒しを求めたんだ」。きゃー、ラブー」

「え、やぁーね。大人をからかうもんじゃありません」

照子はそういいながらも、あやめの言ったとおりだったら嬉しいな、と思うのだった。

「無差別異種格闘技戦に参加される皆様、集合してくださいーい」

格闘大会を取り仕切るスタッフの声が拡声器に乗って響いてきた。

「……さ、そろそろ行かなきゃ。今日も頑張ってくるね」

「いつてらっしゃーい。応援してますね」

にこにこ笑って手を振るあやめに、照子はガッツポーズを取って応え、本部席の方へと走っていった。

今日の参加者にも、今のところ極めし者はいない。

照子はちよっぴり残念だった。闘気を持たない者でも、格闘に長けた者ならばいい勝負が楽しめるのに、決勝戦まではほとんどこずることなく勝ち上がったきたのだ。

「今日もあの男はいない、か」

ついがっかりした顔でつぶやいてしまう。

四年前に一度会っただけの男に執着するのもおかしな話なんだろうかと冷静に疑問を抱く時もあるが、照子の格闘家としての魂はリターンマツチを求めてやまない。

「……あれ？　あの人……？」

いつもの癖で観客席を見回す照子の目に、とある男の姿が飛び込んできた。

身長が二メートルを優に超えているのでとても目立つ。周りの人達にも物珍しそうに見上げられている男は遠目でも判るほどに筋骨たくましく、一目でスポーツに親しんでいる、いやそれ以上にスポーツを生業としているのだろうと思わせるほどだ。帽子を目深にかぶっていて顔はよく判らないが、照子にはどこかで見た覚えがあ

った。

「ひょっとして、真田さんじゃないですか？」

男の近くにいる誰かが声をかけ、それをきっかけに周りでもよめきが起こった。

「真田さん。……ああ、やっぱり見たことあると思ってたら」

照子も、ほうとため息をついて真田を見た。

真田は、大阪のプロレス事務所に所属するレスラーだ。まだ全国的な視点で見ればマイナーなのだが、これからが期待される若手レスラーとして格闘技の雑誌に取り上げられたことがある。

実はとても強い極めし者なのだが、公式な試合に出場する時には闘気はオフにしている。まだ極めし者のみを集めたプロレスリーグやトーナメントを組むほどには、極めし者のプロレスラーがいないらしい。なので真田は非公式の試合に時々、一個人として参加することがあるようだ。

ただ、活動拠点が地方とはいえ一旦プロとして有名になってしまつと、アマチュアの試合に出してもらえることも減つてきたようで、極めし者として闘う機会がほしいと訴えかけている。

真田がまいかた公園に来たのは、やはり試合の機会を求めているのかもしれないな、と照子は思った。しかし彼が観客席にいるということは断られたのだろう。

彼が強い極めし者ならば、一戦交えてみたいものだと思つた。

先週の信司との試合と同じように、大会の一戦ではなくて場所を借りての特別試合のような形なら認めてもらえるかもしれない。

照子はそう思いつくと、早速大会主催者の元へと急いだ。

「あ、てりこさん。どうされました？」

「急な話で悪いんだけど。また今週も試合の後に会場貸してほしいんだ」

「てりこさんですか？」

「わたしも、って？」

「さつき、真田さんって人から頼まれて。ほら、あそこにいるでかい人」

どうやら真田は、無差別異種格闘技戦、つまり照子がこれから決勝戦に挑もうとしている種目の優勝者と一戦交えたいと申し出てきたようだ。

「そうだったんだ！ わたしも真田さんとやってみたいなって思ってたんだ」

照子は思わず目を輝かせた。これは願ってもないことだ。

「頑張ってくださいねてりこさん。今日は極めし者の試合が立て続けに見られて嬉しいです」

「というと、もしかして」

「はい。決勝の相手の方も極めし者ですよ」

なんと、滅多と現れない極めし者が自分以外にあと二人もいるのだ。そしてうまく行けばその二人ともと試合ができる。

これは頑張らねばならない。最終目標であるあの男も、かなり強い極めし者だった。決勝戦の相手にも真田にも勝てないようならば、例えあの男と再会できてもまた負けてしまう。

照子が気合を入れなおしていると、ウワサの決勝戦の相手が現れた。まだ十代と思しき若者だ。照子と同じくらいの身長で、バランスのよい肉付きの体にシャツとGパンを纏っている。

「はじめまして、まいかたチャンプさん」

男の子は礼儀正しく頭を下げた。

「はじめまして。他戸照子よ」

「僕は本多敦ほんだ あつしです。決勝戦ではよろしくお願いいたします」

びしっと姿勢よく立つ本多。その動きや姿勢からして、きつとどこかの道場に通っているのだろう。

まずはこの子に勝たねばならない。照子は心のうちより溢れ出る闘志を瞳にこめて本多を見つめなおして、「こちらこそ」と応えた。

ROUND 2 - 3

程なく、無差別異種格闘技戦の決勝戦が行われると会場にアナウンスが入る。アナウンスといっても拡声器なのだが。

照子は意気揚々とバトルフィールドに進み出た。本多も遅れてはいない。

両者は三メートルほどの距離を空けて向かい合った。

二人とも極めし者ということで、レフェリーはフィールドの外で試合を観戦する。闘気を持たない者が傍にいるのは危険であるし、試合のすべてを見届けることはできないので違反があったかの判定はできないからだ。

それなら極めし者がルール違反をしていないかどうかはどうやって見定めるのかというと、それはもう参加者のモラルに委ねられている。少なくともこの大会では。

『さて、大会のメインイベントとも呼べる無差別異種格闘技戦の決勝戦が行われます。片や、出場すれば負けなし。大会の初代にして無敗のチャンピオン、他戸照子！』

照子の名がコールされると、会場が興奮に沸き立つ。照子は右腕を上げて大きく振り、ギャラリーの声援に応えた。

『そしてチャレンジするは、新進気鋭の極めし者、本多敦！』

本多が極めし者であるということに会場がどよめく。これは面白い試合が見られるという期待をこめた応援がたくさん飛び交った。本多はそれに対して礼をする。

「決勝戦、はじめ！」

歓声が落ち着いてきた頃に、レフェリーの大きく鋭い声が飛んだ。照子も本多も、闘気を強く解放する。照子の闘気は白、本多は赤だ。彼の闘気は、体の周囲は白みを帯びているが、体から離れると真紅になる。

本多の属性は攻撃に重きを置く「炎」だと照子は見取った。八

つの属性の中でスタンダードな属性と言える。照子も過去に炎属性の極めし者と闘ったことはあった。

また、体から放出される闘気の量と勢いで、相手がどれだけ闘気の扱いを習熟しているのかが推測できる。本多の闘気は勢いこそあるものの噴出する量は照子の目から見て少なめだ。本多が意図して闘気の放出量を加減しているというものでもない限り、照子の方が勝っているだろうと踏んだ。

もっとも、先程のアナウンスだと、本多は極めし者となって間もないらしいので、手加減をしているとも思えないのだが。

互いに相手の動きをじつと見つめたままに構えを取る。照子は胸の前で拳を掲げ、軽く体を開いたファイティングポーズ。対し本多は肩幅に開いた両のつま先をまつすぐに照子に向け、脇をしめて拳を構えている。

空手の使い手が、と照子は思った。照子自身も空手の道場に通っていたことがあるので基本の構えを見てすぐに察した。

極めし者となって四年近い照子はすでに、空手の基本スタイルからは離れた闘い方をする。基本を踏まえたうえで、自分の闘いやすいスタイルを確立しているのだ。基本の型から外れた変則的な動きをする超技ちようぎに頼るところが大きいこともある。

超技とは、闘気を使ってなす、格闘術以外の技を指す。よく、格闘ゲームの「必殺技」と例えられるが似たようなものだ。闘気を具現化させ相手に向けて放つものもあれば、自らの身体能力をさらに高めるといったものまである。

属性によつての習得の制限はないが、やはり個々の属性とマッチしたものは扱いやすい。例えば攻撃主体の炎属性なら直接攻撃に繋がるような超技、といった感じだ。

照子は攻守のバランスが取れた天属性。どのような闘いにも対応しうる器用さをもつが、逆にこれといって秀でる点もないために、八つの属性の中では最も闘いの技術が問われる属性といえる。

なので本来、超技も攻撃型、防御型のどちらも扱えるのが天属性

の特徴だが、彼女は攻撃型の方に重きを置いている。

周りのギャラリー達がお息をつめて見守る中、照子と本多は、じりりと距離を詰める。

二人とも一気に対戦相手へと向かう。きっと観客はそう思ったことだろう。

実際、本多は照子に向けて地を蹴った。しかし照子は近づくを見せかけてその場で右足を振り上げた。蹴り出された闘気の光が本多に向かう。

本多はいきなりの飛び道具にほんの一瞬、取るべき行動への判断を鈍らせる。なんとか踏みとどまって防御の姿勢をとるがそれこそが照子の狙いだった。動きの止まった本多にずいと近づいて、頬を狙って拳を繰り出す。

足元への防御に気を取られていた本多は、慌てて顔を傾けてこれをやり過ごす。

思っていた通りだと照子は、にんまりと笑う。

本多はまだ極めし者となって日が浅い。なので極めし者との闘いにおいての超技の役割を熟知していないのだ。

攻撃型の超技 先程、照子が蹴り放った闘気も超技だ が必ずしも、相手に打撃を与える役割で使われるとは限らない。フェイントとしての効果もあるのだ。特に攻撃の超技は派手なものが多いので目をひきつける役割としても十分使える。

体勢を立て直して構えを取る本多を見ながら、これは結構楽に勝てるかもしれないと照子は見積もった。

まるで劣勢である雰囲気吹き飛ばさんとするかのように本多が連続で突きを放つ。しっかりと構えて放たれる拳は、しかしとても速い。胸元、腹、あごを狙ったの攻撃を、照子は身を引きながら腕で外側に弾いてやり過ごす。

これで連続攻撃は終わりか、と照子が一つ息を吐いた。だがそれは甘い目算であった。

本多の蹴りが照子の左脚をはねる。

あつ、と声にならない声が照子の口から漏れ、彼女の体はバランスを失った。そこに中断蹴りが襲い来る。

鈍い打撃音とともに照子は二メートルほど後方に押しやられた。観客からは、おお、とどよめきが上がる。中に悲鳴のような声が混じっているのは照子のファンのものだろう。

本多は、長年この大会でチャンピオンとして君臨してきた照子に対して有効打を浴びせたことが嬉しかったのか、ふっと軽く息をついた。

照子はその隙を見逃さない。ずっと本多の懷に飛び込んで拳を振り上げた。

今度は本多がよろめく番だ。会場がまたざわつく。

照子は攻撃の手を緩めない。本多の軸足を蹴りつけ、腹に拳を叩き込む。最後のハイキックはあとわずかのところで回避されてしまったが、この一瞬で戦局は好転した。

再び距離を取って、二人の極めし者が対峙する。

闘いの中の一瞬の静止にあっても、照子は高まる闘志を感じていた。闘気がもたらす高揚感だけではない。これまでの試合運びを思うときつと遠からず勝利を手に出来る。そうすればあの真田とも闘える。それらを期待しての純粋な興奮だろう。

それでも油断はしない。照子は本多を凝視する。

本多の顔には焦りの色が見える。きゅっと真一文字に結んだ口が小さく開き、食いしばった歯列がちらりと見えた。何かを覚悟するかのような瞳で、本多は照子を睨み返してくる。

次の瞬間。

本多の拳が炎に包まれる。いや、これは闘気が模った炎。本物ではない。

しかし観客には本当に本多の拳が炎を発したのだと見えるのだろう、ひととき大きな歓声上がる。それをBGMにして、本多は照子へと猛進した。

照子もほぼ同時に動く。強く地を蹴った彼女の体は宙を舞う。

まさかここで跳ぶとは。驚いた本多の表情が如実に語る。

その彼の上を跳び越しざまに照子が蹴りを放つ。見事背中にヒツト。

本多は前のめりになりながらどうにか踏みとどまろうとたたたらを踏む。

相手が体勢を整える間に照子は着地し、振り向きざまにもう次の技のモーションに入っていた。

大きく後ろに振りかぶった拳に、白熱色の闘気が集まる。照子が放つ代表的な超技と言っていていい技だ。

もらった！

思わず心の中で叫びながら、照子は腕を前に突き出す。まるで腕にひっぱられるように彼女の体は対戦者へと一直線に突進した。

観客の目には、彼女の服装の上半分を占める赤の塊が尾を引いて本多に引き寄せられたように見えるだろう。これが、照子が「赤き光のてりこ」と称されるゆえんだった。

拳が頬を打つ音が響き、本多の体が意外にもゆっくり、ふわりと宙に持ち上がった。そしてその見た目よりも強く地面に叩きつけられる。

会場から大きな歓声が上がった。

まだ起き上がってこられるか？ 照子は油断なく構えを取りながら本多の様子を見つめる。

照子の様子を観客もまた息をつめて本多を見守る。数秒の間、奇妙な沈黙が会場を包んだ。

本多は呻き声を上げながら上半身を起こした。まだ彼の顔には闘志が残っている。

大技を食らってもなお立ち上がろうとする本多に、観客は拍手を送る。

しかしギャラリーの励ましも、本多を闘いの続行へ促すことはできなかった。

どうにか立ち上がった本多だが、構えを取る足がふらついている。

バトルフィールドの外で試合を見守っていたレフェリーが「中断」と大きな声で言いながら中へと入って来る。いい判断だなと照子は心の中でほっと息をつく。

様子を確認に来たレフェリーに本多はまだ闘いたいと訴えているようだ。しかしレフェリーは首を振った。本多も自分の体の状態は把握しているらしく、今度はレフェリーの判断にうなずいた。

「TKOにより、勝者、他戸照子！」

レフェリーが高らかに照子の勝利を宣言した。照子は右の拳を突き上げて勝利をアピール。観客はひととき大きな声をあげて両者の健闘をたたえた。

照子は本多に近づいて握手の手を差し出した。

「いい闘いだっただね。またやりましょう」

本多は照子の手を取って、ぐっと握り返してきた。

「ありがとうございました。とても勉強になりました」

本多はさわやかに笑う。きっと空手の試合と極めし者の闘いの違いを実感したのだろう。闘気の使い方は言うに及ばず、空手の試合ではあれだけ大きくジャンプしての攻撃などない。それだけでも相手に大きな違いだ。

試合の後、簡単な表彰式が行われ、照子の優勝が改めて称えられた。

『優勝者の他戸さんと、真田さんのエキシビジョンマッチは三十分後に行います』

主催者がアナウンスすると会場はまた歓呼の声に包まれる。決勝戦だけでも迫力のある試合だった。といっても極めし者でもない限り細かな動きは見えていないであろうが。のに加え、もう一戦、極めし者同士の闘いが見られるのだから当然だろう。

照子は大会の主催者が勧めてくれたのもあって、本部席のテントで椅子に腰を落着けた。それほど苦戦はしなかったとは言え、まったく疲れを覚えなかったわけではない。真田との試合に備えて休養を取る必要がある。

「てりこねえさまー！」

椅子に座って汗を拭いていると、あやめの声が近づいてきた。

照子がそちらに視線を向けると、あやめが満面の笑みで走ってきた。

「君、ここから先は関係者以外立ち入り禁止だよ」

テント前でスタッフに引き止められてもあやめはくじけない。

「わたし、てりこねえさまの関係者ですっ。ねっ？」

照子の元に駆け寄るのを邪魔されたあやめは、スタッフに向かってべえと舌を出した。しかし照子に同意を求める時には、あのうるうる瞳で甘えた顔になっているのだから驚きだ。

スタッフの若者は苦笑を浮かべながら照子を見た。

本当はゆっくりと休みたいところだが、主催者に迷惑をかけても困ると思って照子はうなずいて見せた。あやめは、それみたことかといわんばかりの得意顔で若者の横をすり抜けて照子の傍にやってきた。

「ねえさま、すごかったです！ TKOだなんて！」

「ありがとうあやめちゃん」

「ところでTKOって何ですか？」

照子はじめ、会話を聞いていた周りのみんなが思わずコケそうになった。

「TKOは、テクニカル・ノックアウトだ。選手が闘いを続行するのが無理だと判断されて勝負ありとなる。格闘技を見に来るならそれくらいの勉強をしておくべきだな、お嬢ちゃん」

照子が答えるよりも先に、男の声が降ってきた。

いつの間にか、真田がテント近くに来ていた。今のは彼の返答だった。

「ふーんだ、なによ偉そうぶっちゃって」

あやめは真田を見てのけぞっていた。きっと彼があまりにも長身かつ筋骨隆々なので怖いのだろう。

「まあまあ、あやめちゃん」

「あんたみたいでつかいだけのヤツなんて、てりこねえさまにやつつけられちゃえ」

照子の制止を聞いていないのか聞かないふりなのか、あやめは腰に両手を置いてふんぞり返りぎみに真田を見上げると、また、べえと舌を出した。

ああ、また対戦相手を刺激しないで、と照子の眉が八の字になった。

「ただのでかいだけのヤツか、しっかりその目で見ておくんだな」

真田は特に怒った様子はない。にやりと口の端を吊り上げて笑う。あやめは気圧されたのかそれ以上は何も言わなかった。照子は思わずほっとした。

「おれはチャンプさんに挨拶に来たんだよ。いい試合だったな。あんたなら満足いく勝負が望めそうだ。よろしく頼むよ」

真田が照子に視線を向けてきた。

「わたしも、真田さんのお噂は伺ってます。胸を借りるつもりですので、どうぞよろしくお願いします」

照子は立ち上がって真田を見上げ、一礼をする。

胸を借りるつもりで、と言ったものの、照子はもちろん負ける気はなかった。

極めし者として相当の腕前のプロレスラーと称される真田に勝つことで、あの男との再戦でも勝利をつかめるはずと実感したかったのだ。

ROUND 2 - 4

真田は本当に挨拶にだけ来たらしい。話が終わるとさっさとその場から離れていった。どこに行くのかと思えば人の少ないところでストレッチをしている。ファンらしき人が話しかけに行っても手を軽く挙げて会話を断っているようだ。

照子が彼のことを読んだ雑誌のインタビューなどでは、面白おかしく応じているふうに書かれていたのだが、結構ストイックなのかもしれない。

「なーによ。かつこつけちゃって」

同じように真田を目で追っていたあやめが、唇を尖らせてぶーたれた。

「実際、かつこいいよ真田さん。地方のマイナー事務所にいるのがもったいないくらいに強いし」

「じゃあどうして全国デビューしないのかなあ」

「それはわたしにも判らないけどね」

照子は真田のプロフィールを思いだして、それをあやめにかいつまんで話した。

真田は確か年齢は二十代中ごろだったはずだ。関西地方での試合にはそれなりにファンもついている、しかも若い女の子にもファンがいるという、そこそこ人気のレスラーで、関節技と、跳躍を利用した打撃技が得意らしい。

地方での試合に満足していないのか、強さを求めているのか、極めし者との野試合を求めているらしいが最近ではその相手を見つけてるのが一苦労だとか。プロとして試合に出ている者の出場を認めている格闘大会があまりないことと、真田が極めし者としても強くなつて「試合」にならないからでもあるらしい。

「極めし者としても強いんだ……。でもてりこねえさまなら大丈夫ですよねっ」

あやめがぐつと拳を作ってうなずいている。

「大丈夫、って言いたいけど。ふふ、緊張するなあ」

照子はそういいながらも口元に笑みを浮かべていた。

彼女としても強い極めし者と闘うのは久しぶりなのだ。先週に信司と少しだけ闘ったのだが、決着をつけることなく中断させられたのだし、今回はトラブルは起こってくれるなとひそかに願った。

そしていよいよ、照子と真田のエキシビジョンマッチの時間となった。

「がんばってくださいね、ねえさま！」

「ありがとう。じゃ、行ってくるね」

あやめの見送りを受けて照子はバトルフィールドへと進み出た。同じように真田もやってくる。試合を観戦していた時にかぶっていた帽子はなく、服も、タンクトップとアーミーパンツと軽装になっている。

改めて素顔を間近で見たが、結構かっこいいと照子と思う。一言でいうならいまどきの顔だ。レスラーというとかめしい顔という偏見にも似たイメージがあるのだが、真田はレスラーにしては整った顔をしている。なるほど若い女の子にも人気があるわけだ。

ま、結にはかなわないけどね、と心の中のろけて、照子にはんまりと笑った。

「おっ、なんだか余裕のある笑いだな」

真田に指摘されて照子はどきつとした。まさか試合を前に彼氏を思い出してニヤけていたなんて言いたくはない。

「ま、まあね。一応ここのチャンピオンなんだし」
冷や汗たらり。

でも真田は幸いにも言葉通りに受け取ったようだ。

「いいファイトを期待してるよ、チャンプさん」

「ええ。もちろんよ」

今度は試合を前の格闘家の笑みで照子は応えた。

『両者揃いましたところで、エキシビジョンマッチをはじめたいと思います』

本部席からのアナウンスに会場が沸き立った。

『ご存知の方もいらっしゃると思いますが、今日のゲストは、「吼える闘人」の異名を持つプロレス界のヒーロー、真田さんです！』

真田がアナウンスに応えて拳をかがげると、観客席からは真田コールが起こった。さすがはプロの世界で活躍をしている者だ、と照子は感心した。

『そして迎え撃つは、このまいかた公園格闘大会の初代にして現チャンピオン、「赤き光のてりこ」こと他戸さん！』

照子にもファンからの熱い声援が起こる。

彼らの応援に報いるためにも、そしてなにより、あの男に挑むほどの実力を自分が持っている実感するためにも、この試合は負けられない。照子はぐつと拳を握った。

「エキシビジョンマッチ、はじめ！」

決勝戦と同じように、フィールド外からレフェリーが試合開始を告げる。

観客達がいつそうヒートアップしてひいきの選手の名を呼ぶ中、照子と真田は相手を見つめ、構えを取る。

両者は闘気を強く放出した。天属性の照子はいつものように白熱色。対する真田の闘気は体を離れると紫色になる。真田の属性は「雷」だ。

雷は超技を主体に技を組み立てている属性だ。真田は様々な超技をあみ出し、それらを使いこなす闘いを展開するのだろう。プロレス技をアレンジした超技の数々を会得しているに違いない。

そして放出する闘気の量は、真田の方が照子を軽くしのいでいる。これは、思っているよりも厄介な闘いになりそうだ。

真田は胸の高さで手を軽く広げている。ひざと腰を軽く落として低く身構えているとはいえ、彼の胸の高さは照子の目線近く。相手の体を捕まえて技を決めるレスラーにとって、この身長差は少々や

りにくいかもしれないと照子は思った。もちろん格闘技の雑誌に記載されていた真田の技には打撃技もある。それを利用して照子の体制を崩してから関節技などに持つていくという闘いをしてくるのかもしれないと、相手の戦法を予測した。

となると、体勢を崩さないことが照子の勝利の前提条件となってくる。相手の攻撃を受けないことはもちろん、自分の技の隙をつかれることも許されない。何せ相手はプロのレスラーにして極めし者、対戦者の動きを見極めることにとても長けている。

むやみにつっこめない。だが攻撃を仕掛けねば勝つことはない。

照子は慎重に相手の動きを見つめる。

その照子の考えを読んだかのように真田がにやりと笑う。レスラー相手には近距離戦は不利と、どの対戦相手も今の照子のように相手の動きを待っているのかもしれない。

ならば、と照子は右足に闘気を集め、蹴り出した。地面すれすれを白熱色の闘気が滑るように飛ぶ。

真田はそれを左に軽くかわすと、一気に照子に迫ってきた。飛び道具系超技を放った後の隙を狙っているのだろう。

それこそが照子の計算のうちだった。彼女は超技を放った直後に高々と跳躍していた。極めし者の跳躍力をもって真田の頭上に舞い上がる。

照子に向かってきた真田は驚いた顔をしたが遅い。真田が照子の立っていた位置に一瞬のうちにやってきた時にはもう、照子は真田を飛び越えていた。

肩を蹴って着地。のはずが、照子の足は真田が咄嗟にかかげた腕を蹴る。さすがすんなりとは狙った部位に攻撃を決めさせてはくれない。

照子は着地して相手に向き直る。今度は右の拳に闘気を集めて、自ら真田の懐につっこんだ。

対し、真田は照子の腕を取ろうと狙いを定める。

だが照子は真田の目の前、メートルほどで低く身をかめた。

それこそ地面ぎりぎりまで。左手を地に着き支点として超ローキックを放つ。

照子の右足が真田の左足首を捉えた。

真田の動きが止まる。

すかさず立ち上がり、伸び上がりながら放つ照子の拳が、真田の顎に衝撃を加えた。

おおつ、と観客のひときわ大きなどよめき。

照子はバックステップで下がる。

真田は、右の拳の甲で、かすかに切れた唇の端をぐいとぬぐった。彼の表情にはまだまだ余裕がある。さすがプロレスラー。並の極めし者なら今の攻撃でかなりダメージを負っているはずなのに真田はあまりこたえてなさそうだ。

これは先週闘った山属性の暴力団員以上に真田はタフであることを覚悟せねばならない。

照子は唇の端を持ち上げて笑った。強い相手と試合できる喜びの表情に、真田もまた同じように笑みを返してくる。

それから二人は、つきつ離れつ、相手の動きを窺いつつ攻撃を仕掛けた。

真田は主に打撃技を繰り出してくる。まだ得意手である関節技に持ち込めるほどの隙をつかめずにいるのだらう。

一方照子は手数で押していたが、やはり真田の尋常ではない体力に辟易していた。どうすれば彼を倒せるのか、と考え、なんだかどこに攻撃を加えても真田は笑って立ち上がりそうな気がする。それがたえ男の急所であったとしても。いや実際にそこを狙ったりはしないのだが。

両者にらみ合い、技を仕掛けるタイミングを探る。

次のぶつかり合いが勝敗を決することになりそうだ。照子は直感した。格闘家の勘だ。

渾身一滴の技を繰り出そう。照子は闘気をみなぎらせる。

対し、真田も闘気を両手に集めた。まばゆい雷光をまとう手のひ

らが、相手を捕まえんと輝きを放つ。

照子が地を蹴り、真田の懐を目指す。

真田は両手を広げて迎え入れる。

照子は拳よりもリーチの長い蹴りを放った。体をひねり、体重をすべて右の足に乗せる。

右足が真田のみぞおちを捉える。真田が苦悶の声をあげた。

これは勝負ありか、と思われた。

だが真田は苦痛の表情の中にもまだ笑みを浮かべる。と、次の瞬間、照子の右脚はがっちり真田に掴まれていた。

脚を取るために誘われたのだ。気付いた時にはもう遅い。ひざ関節を軽くひねられただけで神経を伝ってくる痛みに照子は顔をしかめる。

「ギブ？」

思わぬ展開に会場がどよめく中、真田が問う。

ギブアップはしたくない。しかし地につけた左足の踏ん張りがきかず、右脚を引き抜くことはできない。拳は真田の手に届くが腰を入れた打撃でなければ真田の手を放させるまでの攻撃はできない。

このままでは負けはほぼ確定だ。

バトルフィールドの外にいたレフェリーがゆっくりと近づいてくる。真田が関節技を極め、動きが止まった二人の様子を窺いに来たのだ。

このまま負けたくない。なんとか脚の拘束を解かねば。

照子は咄嗟に真田に手を伸ばした。

ROUND 2 - 5

照子は左手で真田の右腕を掴んだ。

右脚をとられている状況で起死回生を狙うには、これしかない！

照子は一旦、左手に体重を乗せつつ身をかがめると、すぐさま左足が地を蹴った。

軽くジャンプしながら蹴りを放つ。

真田のひざ辺りを蹴ることができれば右脚を放されるだろう、という算段だ。

しかし思ったよりも当たりが柔らかい。ん？ と思った瞬間。

「……っ！ ぐ、ぐうおおおおっ」

地の底から響くような不気味なうなり声が響いた。続いて浮遊感が照子を包む。

え？ と声をあげた照子は、刹那の後に後頭部に強い衝撃を覚えた。

一瞬目の前がぱつと明るくなったかと思ったら急速に暗転してゆく。

（あれ？ なんで？ なにがあつたの？）

おぼろげな意識の中で照子はそんな問いかけを何度か繰り返していた。

遠くでざわめきが聞こえる。これは観客の声か。その中で規則正しくカウントアップされる声も。

（なに数えてんだろ……）

ぼんやりとそんなことを考えているうちに、男の声が一瞬はつきりと聞こえた。

「両者試合続行不可能により……」

しかしその先は、意識とともにフェードアウトしていった。

「てりこねえさまぁー。大丈夫ですかぁ？」

女の子の甘ったるい、しかし心配そうな声に、照子の意識がはつきりとしてきた。

ふと気がつけば、格闘大会の本部席近くに横たわっている。傍ではあやめが心配そうな顔をして自分を見下ろしていた。

「あやめちゃん。あ、あれ？ ……試合は？」

がばつと起き上がり、辺りを見回す。

もうバトルフィールドは撤収されていて、そろそろ本部席も片付けようかという雰囲気になっている。

「WKOだよ」

声をかけてきたのは真田だった。

「え？ ダブル・ノックアウト？」

「あんたが綺麗に金的に入れてくれたもんだから、さすがにアレはきつかった。まさかそこを狙ってくるとは思わなかったよ」

「き、きんてきつ？」

思わず照子は声高に叫び、わざわざ周りの注目を集めてしまった。スタッフから、くすくす笑いが起こる。

照子は一気に真っ赤になって首を大きく左右に振った。

「狙ってなんかいませんっ！」

「まあ、そりやそうだ。ルール無用のデスマッチならともかく、普通の試合で金的攻撃は反則技だしな。今回は偶発的なものってことで判断されたみたいだからWKOになったに過ぎないし」

そう言えばひざを狙うには少々高く跳んだかもしれない。

しかしよりによって本当に急所蹴りを食らわしてしまったとは。

「ご、ごめんなさい！ かなり痛かったでしょう」

「ああ、かなーりね。これからはいつでも安全に飛び入り参加できるように、ファウルカップを持ち歩くことにしよう」

真田は冗談めかして笑ったが、照子はますます恐縮した。

「ちよつとお。てりこねえさまをいじめないでよ。わざとじゃないんだし。第一、そんなところを蹴っちゃったなんて、ねえさまの方が被害者よ。花も恥らう乙女が金的だなんて」

あやめが腰に両手をあててふんぞりかえる。

擁護してくれるのは嬉しいが、もうそれ以上急所蹴りをしてしまったことを改めて言わないでほしい。照子は苦笑した。

「花も恥らう、ね。勇ましいお姉さんでもやっぱり恥ずかしいものか」

「あつたりまえじゃない！　ねえさまにはちゃんと彼氏さんもいるのに。他の男のきん」

「あ、あやめちゃんつ。もういいよー」

照子が止めなければ延々とその話題をひっぱられそうだ。手を振り回して話に割って入った。

「ま、試合はWKOになったし、勝敗はまだ決していないってことで、またやろうな、チャンプさん」

真田はさわやかに笑って手を振ると、その場を離れかけた。

「あ、ちよつと待って！」

照子が慌てて引き止めるのに真田は驚いた顔をして振り向く。

「真田さんって、野試合とかもするんですよね？」

「ああ、するけど」

「わたし、ある男を捜しているんです。ご存じだったらと思って」

照子は、ずっと捜し求めている男、「あの男」の身体的特徴を真田に聞かせた。真田が知っているとすれば、早々に会えるかもしれない。そう思うと期待を込めて真田を見上げる。

しかし真田はうーんと首をひねった後、申し訳なさそうにかぶりを振った。

「すまないが、そういうった男は見たことがないな」

「そうですか」

照子はがっかりした。野試合の経験の多い真田でも知らないとなると、あの男はこの一帯にはいない可能性が高い。そう思うと、ずっとかかげてきた目標をかなえる可能性すら否定されたようで悲しくもある。

「そんなに強いのか？　その男」

照子の心境を知ってか知らずか、真田が興味深そうに尋ねてくる。「はい。ただわたしは極めし者になったばかりの四年前の話なので、今はどうなってるか判りませんが」

「そうだなあ。相手のことだしな」

照子のこの四年間の伸びが、あの男を越えている場合もあるし、逆にあの男の方が更に強くなっているかもしれない。それは会って闘ってみたいことには判らない。

「だからこそもう一度闘ってみたいの」

照子が、ぐっと拳を握って熱弁すると、真田はふーんと感心したような声を漏らした。

「どんなヤツか興味があるな。よし、おれの方でもその男を捜すように手配してやるよ」

「えっ、いいんですか？」

「おう、任せておけ」

真田はにいつと笑って自分の胸をドンと叩いた。

彼は雑誌の取材なども受けたことがあるので、記者などとも知り合いだ。きっとそのコネを利用して探してくれるに違いない。

照子は満面の笑みを浮かべて「お願いします」と真田に頭を下げた。

互いの携帯電話の番号を交換すると、真田は手を振って去っていく。

「よかったですね、てりこねえさま」

「うん。これで何か手がかりがつかめればいいのに」

真田に勝利を収めることはできなかったが、決定的な敗退でもなかったこと。そしてあの男の行方に関する情報が入るかもしれないという期待に、照子は胸を躍らせた。

真田と対戦してから三日後の火曜日。

仕事が終わりに、帰り支度を済ませた照子の携帯電話が鳴った。着信音からして結ではないなと思いつつ、電話を取り出すと、デ

イスブレイには「真田さん」の文字が。

もしかして、もうあの男に関する情報が手に入ったのだろうか。しかしあれからまだ三日だ。いくらなんでも早いだろうと首をひねりつつ照子は通話ボタンを押した。

「もしもし」

『チャンプさん？ 真田だ』

「はい、他戸です。先日はありがとうございました」

『いやいやこちらこそ。それでだな、本題だが。例の件で渡したいものがあるんだよ。それほど時間は取らせないから、今から大丈夫か？』

「今からですか？ ちょうど仕事場から帰るところなので大丈夫です」

大学の構内の、できるだけ人のいないところへと移動しつつ、照子は胸が高まるのを覚える。

例の件というのは、あの男に関する事なのだろう。それがもうすぐ手に入るとなると当然だ。

それにしても早い。探偵に頼んだって結果が出るまで最低でも一週間ぐらいかかるし、名前も居所もまったく判らない相手を必ずしも捜し当てられるわけではない。まさかガセではなかるうか、とちらりと心配もしたが、とにかくその渡したいものとやらを受け取ってみないことには判らない。

職場に近いまいかた公園の駐車場で待ち合わせることにして、電話を終えた照子は、飛ぶような勢いで駐輪場に向かった。

ヘルメットをすっぽりとかぶり、エンジンをかける動作もどかしいといわんばかりに鍵を取り出して鍵穴につっこむ。パネルが何かに触れるだけでエンジンがかかるシステムでもあればいいのに、いやそれよりも、有名な漫画の未来の道具よろしく、開けるとすぐに目的地に到着するドアがあればいいとさえ思っくらいに、照子の心はまいかた公園へ一直線だった。

大学を出てから十分ほどで、まいかた公園の駐車場に到着する。

真田さんはどこ？ と照子は辺りを見回すが姿は見えない。日がすっかり落ち、所々にある外灯だけでは人を探すのに不向きだが、あの独特の気配がないので彼がいけないことは確信できる。

「なによ。呼び出しておいてまだ？」

思わずそんな理不尽なつぶやきがもれる。真田は照子に気を遣って、照子の職場の近くを指定してくれたのかもしれない、などという相手に好意的な思考は、今の照子には一切なかった。

うろろろそわそわと腕を組んで歩き回る。

ややあつて、車のヘッドライトが近づいてくる。あれが真田さんの車？ と照子は目を凝らした。

少し離れたところに停まった黒い車から、ばかでかい男がにゅつと出てくる。間違いない、真田だ。今日はタンクトップの上に黒いジャケットを羽織っている。

「よお、チャンプさ」

「遅い！」

思わず照子が鋭い声で一喝したので真田はぎょっと驚いて立ち止まった。

「ひどいなあ。それでも急いで来たんだぞ。遅くなったからって急所攻撃はしないでくれよ」

またゆっくりと歩き出しながら真田が笑う。

独身女性に対していささかデリカシーの欠けるジョークに、照子は恥ずかしさで真っ赤になった。しかしこの場合、真田の軽口が照子の怒りを鎮めるのには役立ったようだ。

「しっ、しませんよ、そんなことっ。……ごめんなさい。わたしの用事で来てくださったのに、つい」

照子が詫びると真田は豪快に笑って、ひらひらと手を振った。

「いい、いい。それだけ心待ちにしてたってことだろう」

言いながら、振っていた手をジャケットの懷につっこむ。手を引き抜いた時には、茶封筒が握られていた。

「あんたの探す男のことを方々に調べてもらったんだけど、返って

きたのはこれだった。どうするかは、任せるよ」

真田が封筒を差し出してくる。

どうするか？ と首をかしげながらも照子は封筒を受け取った。この中にあの男の情報があるのか。しかしそれを「どうするか」というはどういう意味だろう。

様々な疑問が脳裏に去来する中、照子は封を切った。

ROUND 2 - 6

封筒から出てきたのは、白い二枚の紙。

一枚はB6ほどの小さなもので、プリンタで印字した文字が見える。もう一枚は折りたたんでいて中の文字は見えない。

照子はまず、小さな紙の方を読む。

「真田 誠 様

お探しの男につきまして、別紙のようなものを入手いたしました。しかしそこに書かれている大会にどのような形で関わっているのかは不明です」

大会？ と照子は小首をかしげ、真田を見た。

真田が先を促すようにもう一枚の紙を見やっただので、照子はそちらを広げてみる。

それは、格闘大会の開催を記した案内状であった。開催日は次の日曜日で、場所は大阪の港にあるコンテナ埠頭となっている。「近畿大会」と銘打っているところを見ると、全国規模で開かれているのだろう。

ルールについての明記は、ペア戦であり、どちらか一方のチームが戦闘不能となった場合か、戦意喪失を宣言した場合、勝利を手にするものである、ということと、極めし者は大会当日、試合前に超技について登録しておくこと、という二点であった。

試合についての細かなルールの記述がない、ということは、いわゆるデスマッチというものだろうか。照子はもう一度真田を見上げた。

「チャンプさんも気付いたか？ 明記されてるルールはそれだけだ。つまり、それ以外は何をやってもいいということになるな」

真田の言葉が照子の考えを肯定する。

大抵、たとえアマチュア大会といえど格闘大会には試合に関するルールがしっかりと定められている。アマチュアだからこそ、なかかもしれない。初めて大会に参加する者には必ずそのマニュアルが配られることになっている。また、ルールに加筆修正などがあれば常連選手にも配布される。

もしかすると、今回真田が持ってきた大会も当日になればルールの配布があるかもしれない。だがなんとなく、照子はこの大会にきな臭いものを感じ取っていた。

「まあもしかしたら当日に、追加で何か配られるかもしれないが。おれは多分、本当にルールはそれだけじゃないかなと思う」

真田も照子と同意見のようだ。

「真田さんは、どうしてそう思われるのですか？」

「まず大会の主催者の素性があいまいだ。あとは開催場所かな」

真田の言葉に照子はうなずいた。

大会主催者の団体名は「格闘大会を盛り上げる会」という、なんとまあ直なネーミングだ。そして照子がインターネットなどを通じて得ている格闘大会の知識を総動員しても、そんな団体名が開催する大会は見たことがない。

そして開催場所が港のコンテナ埠頭というのも不審な点だ。主催者が団体名の通り格闘大会を盛り上げたいと思うなら、ギャラリーの多い公園などで開くのがセオリーだ。この開催場所では観戦に向きである。

「もしかすると闇大会かもしれないな。あんたの探している男がどんな形で関わってるのか、そもそも本当にその大会と関係あるのかも判らないことだし、参加を考えるのは慎重にしたほうがいいんじゃないかな」

闇大会。照子は心の中で反復した。

正式に認められた格闘大会ではないものを裏の大会、闇大会と称することが多い。闇大会では正規の大会よりも優勝賞金が多く出たり、賭けファイトが行われることがあるという。多額の金が動いた

め、不正や危険な行為がまかり通ることが多いのだと、照子は聞いたことがある。暴力団が関わっている大会もあるとまで噂されていて、まっとうな格闘家ならまず出場はしない大会だ。

「参加は事前に登録する必要はないみたいだから、当日までどうするのかよく考えるんだな」

真田はそういいながら、にやつと笑った。

「もしも……、もしも真田さんがわたしの立場なら、どうします？」

一応の参考意見ということで、照子は尋ねてみた。

「おれか？ あんたの立場で考える、となると、どうしてもその捜している男の手がかりがほしいなら出るかなあ。ま、おれは捜している男はいないが出るつもりだけどね」

真田の何気ない出場宣言に、照子は一瞬「そうなんですか」と聞き流しそうになった。

「えっ？ 真田さん、出るんですか？」

照子が驚いて尋ねると真田は二力つと笑って「おう」と応えた。

「実は今までにも何度か闇大会に出たことあるんだよ。あ、これナイショな」

「はい。でもどうして危険だと判ってるのに出るんですか？」

「強いやつと闘いたいからだよ。表の大会だとプロは出場禁止とか規定があるが、闇大会は出場者の素性は問われないことがほとんどだからな」

真田の目はまっすぐと、ここではないどこかを見ている。きっとこの大会に出場してくる強い相手を想像しているのだろつ。試合前でもないのに彼からはとても強い戦意が感じられた。

照子になるほどとうなずくと、真田もまた、二力つと笑ってうなずいた。

「それじゃ、他に聞きたいことがないなら、おれはもう行くよ。出るんなら、次の日曜日に会おう」

言われて、咄嗟に照子は他に質問はないかと考えたが思いつかなかった。この大会に出るのか出ないのかの答えも出せないままに、

きびすを返した真田を黙って見送ることしかできなかった。

やがて真田の車のエンジン音が聞こえ、目の前を通過していく。
既に暗くなつた空に負けないほどの真っ黒の車であつた。

「……ん？ あれって……」

照子は真田の車を見てひとりごちる。

あまり車種に関する知識のない照子だが、車体の前方についたエ
ンブレムには見覚えがあつた。

「なんで、あんないい車に乗っているんだろ」

本人に聞かせるにはいささか失礼な独り言が照子の口から漏れた。
真田の服装などを見ていると、とても高級車がつりあうとは思わ
ない。

まさか、よからぬ仲間にあわせて車ぐらいはいいものに乗れとか
言われているとか、と照子はふと思つた。この闇大会の招待状も、
素性のよろしくない相手とコネを持っているからこそ手に入れるこ
とができたのかもしれない。

闘つた限りではとてもさわやかなイメージの真田。だがもしかす
るととんでもなく裏のある人物なのかもしれないと照子は手にした
封筒をじつと見つめるのであつた。

自宅に戻り夕食を食べた後、自室に早々に引き揚げて、さて、と
照子は腕組みをする。

机の上に格闘大会の招待状を置き、じつと見つめる。

この大会がああ男に繋がる近道かもしれない。

だがもしかするとガセかもしれない。

乗るべきか、そるべきか。

そもそも、ペア戦ということとは、もしも出ると決めたとしてパー
トナーを探さねばならない。一人で出場を決められるわけではない。
誰に相談するべきだろうかと考えた瞬間、彼氏の結の顔が脳裏
に浮かんだ。

しかし結はどちらかと言うと照子がああ男を捜すことは反対なの

かもしれない。はっきりとそう言われたことはないが、なんとなくそう思うのだ。結はとっても心配性だから。

先日のあやめの事件も、ストーカー騒ぎがあったというだけでかなり心配していた。何度も「本当にそれだけだったのか？」と尋ねてくるあたり、照子が巻き込まれでもしていないかと本気で案じているのだろう。あの調子では、あやめが暴力団　桐生会の人達に言わせると暴力団ではなくてやくざらしいが　の関係者で、組同士の抗争に巻き込まれたなどと言うと卒倒するに違いない。なので彼には本当の事は言えなかった。

護身術として合気道を習って、その師範に極めし者の素質を見出されて闘気を習得したという結。さすがに護身用として会得しただけあって、闘気を解放しているところを照子は見ることがない。彼に尋ねても「よほど危ない時じゃないと使わないよ」と言っていた。

優しい人だからなあ、と照子は結を思っ温かい気持ちになる。

「いや、そうじゃなくて」

考えが本題からそれたことに思わず一人でツツコミを入れてしまった。

問題は、危険かもしれない格闘大会に出てまであの男を捜す意義があるのか、というところだ。

照子は、あの男と初めて出会った時のことを思い出す。

屈辱の敗北を思い、自然と握り締めた拳に力がこもる。悔しさに顔が熱くなるのを感じる。

あの記憶を塗り替える闘いをしなければ、自分が格闘を続けていく上での大きな障壁となる。

そう思うと、答えはおのずと決まってくる。

照子は大会への出場を決め、まずは結にパートナーとして出てもらえないか聞いてみよう、と思った。それで駄目なら他に探すしかない。

さて、なんと行って切り出そうか。照子は作戦を練った。

週の半ばで突然、彼女からの呼び出しを受けて結は驚いていた。照子はどちらかと言うとあらかじめ予定を立てて動く人だと思っていたのだが、そうではなかったのか、それともよほどの緊急性がある用事なのだろうか。

先日の、「桐生会」と対立する暴力団との抗争の一件が決着し、結は今はどこにも派遣されていない。次の仕事を待ちながらSEとしての仕事を手伝っていた結は、今日はさほど遅くまで残業をすることがなく、照子の希望に応えることができそうだった。

「ごめんね、急に呼び出しちゃって」

先に、待ち合わせ場所の喫茶店についていた照子が心配そうに見上げてくる。彼女も仕事帰りらしい。服装が休日の少しラフなそれとは違い、シックなブラウスとパンツスタイルだ。しかし服装の乱れに気を遣ってなおしたようだが髪にまで気が回らなかったらしく、前髪はヘルメットに押し付けられたことが判るくらいに、ぺたんとしている。また、足元もバイクに乗るためにスニーカーで、服装と少しアンバランスな感じである。

思わず笑みが漏れそうになるのをそっところえて、結は照子の向かい側に腰を下ろした。

「いや。結構嬉しいよ。会いたかったし」

素直に述べると、照子は嬉しそうに目を細めて笑った。

注文を取りに来たウェ이터にそれぞれ飲み物を頼むと、照子はじつと結を見つめてくる。

彼女の表情には、隠しような不安が見て取れた。

こうして急に呼び出してきたことと、何か関係があるのかもしれない。果たして自分から問うべきか、彼女から話出すのを待つべきか、と結が考えた時、照子が意を決したというように口を開いた。「結は、わたしが格闘大会に出てることって、反対？」

小首をかしげ、どんな答えが返ってくるのか心配していますと、ありありと判る顔で尋ねられた。

「別に反対なんてしないよ。反対するぐらいならとつくにしてるし」
結の言葉に照子はほっと息をついた。

ふと、結は思いついた。これを期に先日的事件について話してもらおうか、と。やはり直接関わった者の証言はありがたいものだ。事件は解決扱いになっているが、資料の書き足しをするのはいつでもできる。そしてその資料は詳しくれば詳しいほど後々の参考となる部分が増えるだろう。

「よかった。結は反対かと思ってた」

結の思考をさえぎるように、照子が笑顔を浮かべて言う。

「どうして？」

「いくら正規の格闘大会だって言っても、下手をしたら怪我とかしちゃうし。わたしは平気だけど、ほら、結ってちょっと心配性なところがあるかなあ、って」

「そんなに心配性って程でもないと思うけど」

本当は少しばかり心配なのは確かなことだ。しかしだからといって照子に大会に出ることをやめてほしいと言ったところで聞きはしないだろう。

結は、照子が大会に出ること自体を危険視しているわけではない。だが照子が数年前に彼女を叩きのめした男を捜したいあまりに無茶をしないかと心配しているのだ。

照子が格闘大会に出ることを男を捜す手段としているうちはまだ安心だ、と結は考えている。下手に抑制して、結の知らないところで危険なことに首をつっこんでほしくはない。身の回りの危険にハラハラするのは仕事からみだけで十分だ。

「じゃあ、試合に出ることあの男を捜すことも、反対じゃない？」
再び照子は不安そうに尋ねる。なるほどこれが聞きたかったのか、と結は納得した。

「ああ。反対はしないよ。まいかた公園で大会に出て、その男を捜

すことは別にそんなに危険だとは思わないからね。見つかつて、彼が再戦に応じればそれでよし、だろう？ それよりも大会以外で無茶をしてほしくないかな。この前も大会のそばで何か事件があったんだし」

さあ、この話をきっかけに、照子にその事件に関わったのだという言葉を引き出せば、と結は目論んでいた。

だが照子は何かを憂えたような顔で「うん、そうだよ」と言うと、笑みを作った。

「格闘大会に出ることはいいんだよね。よかった、それだけでも聞けて」

照子は「はい、この話はおしまい」とでも言わんばかりにうなずいて話題を変えた。

（え、おい、俺の話はまだ……）

結は心の中で焦ったが、もうすっかり頭を切り替えてしまっている照子を相手に、話を蒸し返す事ができなかった。

諜報員になって七年。照子が今までの捜査対象者の中で一番手ごわい相手だと改めて思う結であった。

闇大会の出場を心に決めたはいいが、パートナー選びで詰まってしまった照子。

結を呼び出して、自分があの男を捜すために動いていることをどう思っているのか確かめてみたが、彼はどうやら、まいかた公園でのみの活動に固執しているようだ、と照子は感じた。

結いわくストーカー事件のことに触れる彼の表情は、何かを話してやろうという雰囲気を感じていた。絶対に「無茶はするんじゃないよ」と言いたかったに違いないのだ。

そんな調子ではとてもではないが闇大会に出場するなどと言えるわけもなく、照子はさっさと話題を切り替えたのであった。見込み

がないのに余計なことを話して闇大会への出場を止められたのでは、
たまったものではない。

しかし、困ったな、と照子は腕組みをして首をひねる。

ペア戦ということは、どうにかしてパートナーを見つけねばならない。まいかた公園の大会に来る常連さんに事情を説明してパートナーに仕立ててもいいのだが、できるならもう一人も極めし者の方がいい。

「極めし者かあ。真田さんはもう出るって決めているということはパートナーも確保しているんだろうなあ」

照子は他に極めし者の知り合いがない。

と、思ったが。

ああ、そうだ！ と手をぽんと打ち鳴らした。

富川信司。彼がいるではないか。彼はなにやら普通でないシチュエーションにも慣れている様子であった。闇大会ぐらいどうということはないだろう。彼も極めし者と闘える機会を欲しているように見受けられたし、真田のことをエサにしておびき出し、もとい、誘い出せばいいのだ。

照子はこれ以上ない名案を思いついたと満面の笑みを浮かべ、携帯電話を取り出した。

ROUND 2 - 7

携帯電話を操作して、信司の電話番号を呼び出すと通話ボタンを押した。

コール音が鼓膜を震わせる間、照子は胸を高鳴らせながら相手が電話を取るのを待っていた。

『もしもしー？』

ややあつて相手が電話に出た。あまりにものんびりとした若い男の声に照子は思わず笑みが漏れた。

「こんばんは信司くん。他戸照子です」

『照子……？ ああ、てりこさんかー。こんばんは』

信司は少しだけ考えてから照子のことに思いあたったようだ。どうやら彼には、ニックネームの方が定着しているようだ。

「そうそう、てりこです。ちょっとお願いしたいことがあつて」

『早速ファイトの続きの話とか？』

「あー、似たような話かなあ」

格闘大会に誘うのだからファイトの話であることに違いはないと照子は都合よく考えてあいまいに肯定した。

『判りました。じゃあ次の日曜日にも』

「明日っ、明日にしてほしいのよ」

信司をさえぎって照子が言う。日曜日では間に合わないからだ。

『明日？ また急な話だね。まあいいや。じゃあ、まいかた公園に行けばいいのかな』

照子は相槌をうつて、仕事が終わってからの時間に信司と待ち合わせることにした。

電話を切つて机の上に置きながら、今度こそはパートナーをゲットしなければと拳を握る照子であった。

木曜日の夕方、照子はまいかた公園へとバイクを走らせていた。

信司を説得できなければ他に極めし者の友人知人がいないので、パートナーは闘気を持たない者となる。いやそもそも、闇大会に出場してほしいと持ちかけられる相手の候補すらなくなってくる。

何が何でも信司を説き伏せねば、と意気込む照子は、まいかた公園の駐輪場にバイクを進めた。

平日の日暮れの駐輪場に残る数少ない人達も、もう皆帰り支度だ。そんな中、停めたバイクの傍らに立って辺りを見回している信司の姿を見つけた。

彼のそばにバイクを停めて降りる。

ふと気付けば、信司のバイクが新しくなっている。あの、中古でいかにも寿命だろうと心配していたママさんスクーターではなく、その前に乗っていたものと似た四〇〇ccのバイクだ。

「こんにちは、てりこさん」

「こんにちは。バイク新調したんだね」

指摘すると信司は軽快に笑った。

「そうそういつまでもあのオンボロには乗ってないよ」

「でもどうせすぐにぶつけて壊すんでしょ……」

思わず小声でぼそりとやると、信司の笑みに苦いものがまじった。あながち間違っではない指摘なのだろう。

「まあまあ、バイクのことは置いといて。ファイトするんだろう？ 完全に暗くなる前に始めたほうがいいよ」

話題をそらせようとしているのがありありと判る申し出だ。

「あー、そのことなんだけど。実は、今日試合するって話じゃなくて、頼みたいことがあるのよ」

すっかり試合をするつもりできたのだろう。信司は拍子抜けだというように右肩をガクリと落としてしまう。

「ごめんね。でも信司くんにとっても興味深い話だと思うんだ」

「というത്？」

「これなんだけど」

照子は例の招待状を信司に手渡した。

「格闘大会の招待状。信司くんならそういう大会に興味があるかな
と思うて」

信司はふうんと相槌をうつて紙の文字を目で追っている。やがて
顔を上げて、照子と手紙を交互に見比べた。

やはり海千山千であるう信司は、それが闇大会の可能性が高いと
すぐに察したのだろう。

さあ、ここからが勝負だ。一気に信司を口説き落とさねばならな
い。

「信司くん、強い相手と闘いたいつてタイプかなあと思ったんだよ。
この大会、極めし者がたくさん集まってくるはずなの。あんまり大
きな声では言えないけど、とある極めし者のプロレスラーも出るし。
それにね、えーっと」

最初は勢い込んでアピールしていたが次第に失速してくる。

そんな照子に信司は微苦笑を浮かべてうなずいた。

「まあ元々修行中の身だし、一緒に出てって言うなら出てもいいよ」
「あ、あはは。よかったー。いざ口説こうと思うと考えていた言葉
も出てこないもののね」

思っていたよりもあっさりと承諾がもらえた。今度は照子が拍子
抜けに思わず肩をガクリと落とす番だ。

「テンパっちゃったわけだ。でもそこまでして出たいなんて何かあ
るの？ てりこさんだってこれが闇大会だということは気付いてい
るんだよね？」

「そうなのよ！ 実はわたし、ずっと捜している男がいるんだけど、
その男がこれに関わってるらしいのよ」

信司が話の核心に触れてきたので、思わず照子は彼の手を取って、
ずいとせまった。

「主催者ってこと？」

「うーん。よく判らないのよね。そもそも本当に関わっているかも
判らないんだけど」

「そこまでして闘いたい男なんだ。そんなに強いのか？」

「強かったし、屈辱だったのよ！」

四年前の、あの男との邂逅を思い出して熱く語りだした。

その日も春であつた。暖かな日差しが心地よい休日の午後、照子は大学の行事による休日出勤の帰り道で「まいかた公園」のそばを通りかかった。

数年間通っている空手道場の師範から闘気の扱いを学び、ようやく極めし者として一人前と認められたばかりの照子は、同じ極めし者と闘ってみたくて仕方がなかつた。

まだその頃には、まいかた公園で格闘大会は開催されておらず、極めし者の認知度もさらに低かつたので、対戦相手は自力で探すしかない状況だつた。もちろん師範は極めし者なので師範とは手合わせができたが、照子は違う相手とも闘ってみたいと常々思っていた。師範に誰か相手を紹介してほしいと頼んでみたが、もう少し腕を上げてからと却下される。

なので照子は余暇に公園などを訪れる機会があれば、そこに極めし者がいないかどうかを探していた。その日も公園にバイクを停めて辺りをうろつろとしたのだつた。

照子は察した。木陰で休む、その男から一瞬発せられた闘気を。

木の根元に座っている男の体を包むのは、この季節に見ると暑苦しさを覚える黒のシャツとズボン。短く刈りそろえた髪は明るい茶色。

近づいてみると、彼は休んでいるのではなくにやら書類を読んでいるようであつた。強面とも言える顔の眉間に深いしわを刻ませて、手にしている紙を凝視している。闘気の放出は一瞬のものだつたらしく、勘違いだったのかと疑問に思ったが、照子は自分の直感を信じて男に話しかけた。

「あの、すみません。もしかして極めし者……、ではないですか？」

照子の声に男は少し厳しい目の表情そのままに照子に視線を向けてくる。間近で顔を見るに、恐らく照子よりは少し年上　二十代

後半ほどと思われる。

「あ？ なんだおまえ？」

「わたし、他戸照子といいます。極めし者と勝負してみたくて。違
つてたらごめんなさい」

「ほう？ ということおまえも極めし者か」

「ええ、一応は」

照子の応えに男は唇の端を吊り上げて笑った。

「俺の一瞬の気を察するなんて、期待できそうだな。いいだろう、
やろうぜ」

男は書類を脇に置いてあつた鞆にしまつて立ち上がる。

身長は百八十台半ばだろうか。かなり背が高く、照子は驚いた。

照子の様子を気に留めるそぶりも見せず、男は数メートルほど場
所を移動した。

「この辺でいいだろう」

男が闘気を解放する。彼の体をうつすらと包むのは紫色の闘気。
つまり彼の属性は「雷」だ。

超技に長けた属性か、と照子は師匠から教わつた知識を元に男の
闘い方を頭の中でシミュレートする。

「さあ、かかつてきな」

男の声に照子も闘気の解放を強め、白熱色の闘気に包まれた体を
一気に男に接近させる。

空手の型にのつとつた正拳突きと蹴りを幾度か繰り出したが男に
はかすりもしない。まるで攻撃を出す瞬間に心を読み取られている
かのようなタイミングでかわされる。

よし、こうなったら闘気の塊をぶつけてやる、と気を練り拳に集
中させる。

だが照子はその拳を振り上げた時には、もう男の姿が視界から消
えていた。

え？ と思つたその瞬間、右サイドから男の蹴りが襲い掛かつて
きた。

いつの間に、と思う間もなく脇腹を蹴り上げられて照子の体は吹き飛ばされる。今まで味わったことのないほどの痛みだ。照子の体は数メートルほどもんどりを打って転がった。

立ち上がるうとするにも蹴られた箇所が痛くて痛くて。これが闘気をこめた攻撃の破壊力かと涙目の照子は近づいてくる男を見上げた。

「……おいおい。マジか。もっと楽しませてくれるかと思ったのによお」

男の軽蔑したような視線を浴びせかけながら照子は歯を食いしばって身を起こそうとする。だが体がまったく言うことをきいてくれなかった。

「ふん。つまらねえな。ほんつとにつまらねえ。止め刺す気にもなりやしねえ」

男はつま先で照子の肩を蹴飛ばす。仰向けに寝転がった照子を見て、男は憤りにも近い怒りの表情を、ふと緩めた。

「おいお嬢さん。これからは身の程つてものをわきまえて勝負を挑むんだな。でないと、格闘家としてだけじゃなくて人生までジ・エンドだぜ？」

男がなにやら手にした物を照子の顔に近づけた。

何かをされた、という感触はあったが照子はそれを見極めることができなかった。

「それで、あの男は行っちゃったのよ。名前も聞けなかったわ。で、なんとか動けるようになってから家に帰ったんだけど、鏡見てびっくりよ！」照子は自分の額の真ん中を指差す。「ここにね、黒マジックででっかく星印が書いてあったのよつ。しかも油性マジックよつ！」

「あはは。負けたから黒星って意味？ その男なかなかしゃれっ気あるよね。おれだったら単純に『肉』とか『骨』とか書いたかなあ」信司が思い切り軽快に笑ったので照子はキツとにらみつけた。

「冗談じゃないわよ。うら若き乙女の額に落書きなんて。消すのにどれだけ苦労したと思ってるのよ。次の日なんてうつすらと残ってるのを『何これ？』って指摘されてごまかすのにどれだけ苦労したか！」

あんまりにも照子が勢い込んで怒鳴り、信司にずいと迫ったせいで、彼はしりもちをついてしまった。

「ごめんごめん。で、それを根に持って男を捜しているんだ」

冷や汗を流して立ち上がりながら信司はズボンの埃をはたき落とす。

根に持つてという言い方は気に入らなかったがとりあえず照子はうなずいた。

「……これからは相手見て落書きしよう」

信司が口先だけで小さくつぶやいた言葉の半分も照子に聞こえなかったのは幸いかもしれない。

「あの負けっぷりを覆さない限り、格闘やめるにやめられないわ。まあ今のところやめようとは思ってないけど。……とにかくあれが格闘人生の唯一にして最大の汚点なのよ」

信司は何かを考えるように顎に手を当てて首をかしげると、照子に視線を戻してきた。

「おれは、さつきも言ったとおり闇大会だろうと何だろうと別にかまわないけど、てりこさんはそれでいいのか？ 下手をしたらリベンジどころか格闘人生の汚点が増えちゃうかもしれないよ？」

的確な切り替えしに照子は言葉を詰まらせた。

しかし、拳をぐつと握りなおしてうなずく。

「かまわないわ。とにかくもう一度あの男と闘いたい」

その応えを受けて信司はうなずいた。

「判った。それじゃ大会の間はパートナーってことで、よろしく」
信司の差し出した手を力強く握り返して、照子も満面の笑みでうなずいた。

日曜日は埠頭の近くにあるショッピングセンターの駐輪場で待ち

合わせることに、ルールに記載してある「超技に関する届出」がきちんとできるように超技名を考えておくことを確認して、信司は帰って行った。

と、携帯電話にメールの着信を知らせる音楽が鳴る。この着信音は彼氏の結だ。

「……あー、なんでこんな時に」

メールを見て照子は愕然とする。次の日曜日はきちんと休みが取れそうだからデートをしようという誘いだっただけ。

結には大会のことは話せない。「ストーカー事件」だけでもあんなに心配していた彼を心臓麻痺で殺すようなものだ。

何とか自然な形でデートを断らないといけない。

「滅多にまともに休み取れないくせに、もうっ」

自分の都合は棚に上げた恨み言をつぶやいて、照子はキャンセルの理由を考えはじめた。

そこへ。

「てりこねえさまー」

甘ったるくも可愛らしい少女の声が聞こえてきた。

そちらを見ると、あやめが嬉しそうに駆けてくる。後ろからは「桐生会」の若頭、田村が慌てて追ってくる。

「あやめちゃん。こんな時間にこんなところで会うなんてね」

「はい！ 会いたいと思った時に会えるなんて、これがわたしとてりこねえさまの運命です」

そんなオーバーな、とっつこみそうになった照子だが、ふと引っかかりを覚えて首をかしげる。

「会いたいと、って。じゃあ、あやめちゃんはわたしを探してここに来たの？」

「はい。繁華街の方に遊びに行っていたのを田村に見つかって連れ戻されちゃうところだったんですけど。もしかしてこの時間だったらてりこねえさまがここに来ていないかなあって思ったんです」

あやめは、ぺろつと舌をだした。

「お嬢。寄り道はいけませんぜ。くみちよ、いえ、親父さんが心配なせます」

田村は額の汗をぐいとぬぐってあやめに小言を言った。「桐生会」の組長である総一郎を親父さんと言い直した辺り、やくざを嫌うあやめに配慮したのだろう。

なかなかいい男じゃない、と照子は微笑んだ。

あやめは田村に「判ってるわよ」と言いながら頬を膨らませて見せ、照子にはいつものように可愛らしい笑顔を向けた。

「でも、今日は大会ないんですね。てりこねえさまはどうしてここに来たんですか？」

公園が静かなことでイベントはなかったのだと、あやめは気付いたようだ。相変わらず察しのいいところがあるわねと感心しながら、ふと照子は思いついた。

「どうして、って……。そうだ。あやめちゃん、ちよつと名前を貸してほしいんだ」

照子は先程までの信司とのやり取りと、偶然にも大会の日に彼氏にデートに誘われたことを手短かに説明する。

「彼には大会に出ることは内緒にしたいの。だから、日曜日はあやめちゃんと遊びに行く、ってことにしてもらえないかな」

そつ話を締めくくると、あやめはキラキラと目を輝かせてうなずいた。

「いいですよ。ほかならぬねえさまの頼みですから。でもわたしからもお願いがあります」

「なあに？ わたしにできることなら何なりどうぞ」

「いつでもいいから、本当にわたしと遊びに行ってくれること。それと、その大会。わたしも見に行きたいです」

前者はかまわないが後者はどうなのだろう、と照子は返答に詰まった。

「まいかた公園の試合じゃないんだから、危ないよ。わたし達が試合の間はひとりになっちゃうんだし」

照子が困った顔で言うと、田村が胸に手を当てて軽く頭を下げる。
「それでしたら、不肖この田村。お嬢のボディガードを務めさせて
いただきます。俺もアネさんの闘いっぷりを見てみたいですし」

やくざの若頭にアネさん呼ばわりされるとななんと落ち着かない
なあと思いつつ、あやめは田村が面倒をみるということなら、まあ
いいか、と照子はうなずいた。

「ただし、大会の主催者が観戦ダメって言ったら、それに従うこと。
いい？」

「判ってます。ねえさまに迷惑はかけられないもん」

そう言って、にこつと笑うあやめの可愛らしさに、照子まで思わ
ずにやけてしまう。

「それじゃ、そろそろ帰らないと。あやめちゃんもまっすぐ帰るん
だよ」

「はあい。……ねえさま。試合もデートも、楽しみにしていますね」
あやめは手を振って走っていく。彼女が急に走り出したので、田
村が慌てて後を追った。「お嬢ーっ、待ってくださいえー」と叫ぶ彼
の声に、照子は哀愁を覚えた。

彼らが見えなくなるまで見送ると、照子も愛車にまたがってエン
ジンをかける。

いよいよ、あの男へ繋がる道が開けたかもしれないことに照子は
大満足だ。

とにかく試合に出て、勝ってみせる！

決意を胸に、バイクをいつもより心持ち速く走らせる照子であっ
た。

(ROUND 2 了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6884f/>

真・まいかたチャンプの挑戦

2010年10月9日16時50分発行